

仏蘭西学研究

2021. 6. 12

第 47 号

目 次

[論文]

日本新聞業界の拡大を支えたフランスのマリノニ型輪転印刷機
..... 本間 圭一 … 3

1878年パリ万国博覧会における日本の意図に関する一考察
— 開拓使による鮭缶詰出品を例に —
..... 樋口いずみ … 15

1940年ドイツ軍「電撃戦」とパリ陥落はどう報じられたか
— 日米ジャーナリスト報道の比較考察試論 —
..... 池村 俊郎 … 27

[研究ノート]

和仏辞典の系譜と問題点
..... 木村 哲也 … 44

アランの思想に基づいた我が国の社会現象の分析
..... 高村 昌憲 … 56

学会記録 68

日本仏学史学会

日本新聞業界の拡大を支えたフランスのマリノニ型輪転印刷機

本 間 圭 一

はじめに

日本の新聞の総発行部数は2019年、3781万部に上り、このうち読売新聞と朝日新聞は世界1位と2位の部数を維持している。近年、新聞離れは続いているが、日本は今なお、世界有数の新聞大国と言える。

それを支えているのは高度な印刷能力にほかならない。最新鋭の高速印刷システム「オフセット輪転機」は1時間あたり14万部以上を刷り、朝夕刊にわたる新聞の大量供給を可能にしている。

もっとも、17世紀に新聞が登場した欧州に比べると、日本の新聞の歴史は浅い。今日の新聞のひな型とされる横浜毎日新聞が創刊されたのは、明治時代に入ってからだった。その後も多くの新聞が誕生したが、手作業による印刷が主流だったため、部数は多くなかった。

ごく一部の読者を相手にしていた日本の新聞が飛躍的に部数を伸ばす一つのきっかけを作ったのが、フランスの企業家イポリット・マリノニ (Hippolyte Auguste Marinoni, 1823-1904) だ。貧困から身を起し、少年時代から牧場で働いた苦労人は、印刷技術の改良に没頭して新型輪転機を開発し、仏紙の部数増に貢献した。印刷速度がこれまでの10倍以上となるマリノニ型輪転機とその改良版は、日本各地の新聞社でも導入され、新聞が大衆化する一因となった。新聞業界が形容するように、新聞印刷で革命が起こったのだ。

日本ではこれまで、マリノニ型輪転機に焦点があてられることは少なかった。しかし、この印刷機の登場で、日本の新聞業界は大きく変貌を遂げることになる。本稿では、第1節でマリノニが活躍した19世紀のフランスの新聞業界、第2節でマリノニの人生、第3節で日本の新聞業界の草創期、第4節でマリノニ型輪転機の導入とその効果を考察する。「新聞界のナポレオン」⁽¹⁾と

呼ばれたマリノニの立身出世を振り返りながら、マリノニ機が日本の大衆社会に与えた影響や、メディアにとって意味するものを検証する。

1 フランスの新聞の発展

フランスは日本よりも新聞の歴史が古い。ルイ13世の侍医となった医師兼記者のテオフラスト・ルノードー（Théophraste Renaudot, 1586-1653）が1631年、リシュリユー首相の許可を得て、ガゼッタ紙（*La Gazette*）を創刊した。新聞の原型となる最初の定期刊行物とされる。縦23センチ、横15センチの紙を4ページ印刷し、発行部数は300～800部だった⁽²⁾。

新聞が増えるのは18世紀後半のフランス革命期だ。革命が起こった1789年には、約140紙が発行され、特にバスティーユ襲撃事件が発生した7月以降の創刊件数が多かった⁽³⁾。「ヌーヴェリスト」と呼ばれたブルジョワ出身のジャーナリストが、カフェ、大学、劇場で情報を収集し、パリのルクサンブール公園など公共の場で、王政や宮廷の「ヌーヴェル」を提供し⁽⁴⁾、民衆を革命に駆り立てた。これが新聞の革命と言われる所以だ。

革命の成果である1789年の人権宣言は、第11条で著作・出版の自由を保証し、これにより、検閲は廃止された。新聞は旧封建勢力やカトリック教会を批判し、近代ジャーナリズムの先駆けとなる。1789～1800年に発行された新聞や雑誌は1500に上り、1789年以前の150年間の2倍を超えた⁽⁵⁾。

ナポレオン時代に新聞が規制された後、1830年の7月革命や1848年の2月革命を経て、民衆は再び報道の自由を勝ち取る。この頃登場したのが、マリノニ型輪転機に代表される新型の印刷機だった。新聞の大量印刷が可能となり、高額だった価格は下がり、部数がさらに伸びた。新聞に広告を掲載する顧客が増え、広告収入は新聞社の財務を支える貴重な収入源となった⁽⁶⁾。

その一例が、「世界最安値」という触れ込みで、1863年に創刊されたプチ・ジュール紙（*Le Petit Journal*）だ。1868年に発行部数が20万部を超え、約30年間に渡り新聞業界の盟主の地位を維持できた⁽⁷⁾のは、1872年に投入されたマリノニ型輪転機による大量印刷と、1部が5サンティームという他紙の3分の1の価格のおかげだった。マリノニ機が薄利多売のビジネスモデルを支えたと言えるだろう。

他紙もこのモデルを追従し、1870年にパリの日刊紙は計100万部に達した⁽⁸⁾。民衆に行き渡った新聞は世論を動かし、政治や社会に影響を与えるようになった。1894年にユダヤ系のアルフレド・ドレフュス大尉がスパイ容疑

で逮捕された事件では、不当逮捕を告発するエミール・ゾラの手記が1898年にロロール紙 (*L'Aurore*) に掲載されると、ドレフェス擁護の世論が強まり、ドレフェスが翌年に釈放され、さらに1906年に無罪判決を受ける契機となった。

フランスでは19世紀末から20世紀初頭までの時期を新聞の「黄金時代」と呼ぶ。出版の自由が認められる中、新聞が社会に浸透し、世論を通じて政治や社会を動かした時代だった。それに貢献したのが改良印刷機による大量印刷だった。

2 イポリット・マリノニの人生

フランスの新聞の成長を支えた一人が新型輪転機を開発したマリノニだった。「実業家であり、開拓者であり、印刷機の製造者であり、新聞の所有者であり、そして、大きな影響力を持った」⁽⁹⁾人物として知られる。少年時代から印刷機器の改良に打ち込んだ技術者が、有力者の知己を得て、新聞業界を変えることになる。

1823年、憲兵隊員だったアンジュ・ジョセフの子として、パリ郊外のシブリー・コートリーで生まれた⁽¹⁰⁾。家族には10人の子供がいて、生活は貧しかったため、マリノニは10歳の時、伯母宅に預けられ、牧場で牛の番をして小遣いを稼いだ⁽¹¹⁾。

12歳になると、パリの印刷会社で機械工の見習いとして働き始めた。その3年後には、活版印刷業ピエール＝アレクサンドル・ガボー (Pierre-Alexandre Gaveaux, 1782-1844) の弟子となり、そこで技術を取得した。1日20時間働き、印刷機の改良に昼夜努力したという。勤勉で独創的なマリノニをガボーは引き立て、技術部門の責任者に抜擢した。この頃には、印刷業界で生きていく決意を固めた⁽¹²⁾。

こうしたマリノニの才能と人格を聞きつけたのが、ラプレス紙 (*La Presse*) など有力紙を所有し新聞王と呼ばれたエミール・ド・ジラルダン (Émile de Girardin, 1802-1881) だった。発行部数を増やそうとしていたジラルダンはガボーを通じてマリノニに技術革新を託した⁽¹³⁾。マリノニは25歳となる1848年、4つのシリンダ (胴) を備えた鉛版の輪転機を発明した⁽¹⁴⁾。この輪転機は高速印刷を売り物にし、「実に汽車と人車との相違がある」⁽¹⁵⁾と言われたほどだ。ジラルダンはこの輪転機を自社に導入し、ラプレス紙を1時間に5500部印刷し、部数増につなげた⁽¹⁶⁾。

名声を得たマリノニは1849年、自らの印刷会社を設立した⁽¹⁷⁾。廃業と創業を重ねながら、輪転機の改良に明け暮れる。マリノニは1867年、両面印刷の新型輪転機を開発し、フィガロ紙 (*Le Figaro*) などに導入された。

マリノニ型輪転機の特徴は、4本のシリンダが縦状に配置され、一番上と一番下が鉛版の活字胴、中央の2本が印刷圧力を得るための圧胴となっている。巻き取り紙を両面印刷した後、適当な大きさの枚葉紙に裁断し、折り畳み、機外に自動排出される。

輪転機の製造は19世紀初頭にさかのぼり、米国のバロック式や英国のウォルター式が既に普及していたが、印刷能力は1時間あたり1200部程度に過ぎなかった。マリノニ型はこの速度を大幅に向上させ、1時間あたり約2万部印刷でき、当時としては考えられないスピードで、「マリノニの印刷機」と呼ばれた⁽¹⁸⁾。1867年にパリで開かれた万国博覧会に展示されると、600万人の目に触れることになり⁽¹⁹⁾、マリノニの名が世界に広まることになった。

マリノニはその後も、ジラルダンとともにプティ・ジュール紙の運営会社を設立するなど2人の信頼関係は続いた。1881年にジラルダンが死去すると、マリノニはジラルダンが持っていた同紙の株式を買い取り、翌1882年に経営者となった。編集作業を編集長に任せる一方、自ら開発した最新式の印刷機を多数導入し、裁判所など取材現場に通信機器を置くなど、速報と大量印刷の態勢を整えた⁽²⁰⁾。11台の印刷機で1日の発行部数は125万部に達し、その状況は、巻き取り紙が「急流の如く」機械中を通過するような様子だったという⁽²¹⁾。週刊の8ページの付録にカラー印刷も導入し、その人気を決定づけることになる⁽²²⁾。プティ・ジュール紙の発行部数は欧州一となり、マリノニは政府から栄誉あるレジオン・ドヌール勲章を与えられた。

マリノニは1904年に死去した。マリノニ社はその後、仏ボワラン社との合併や、米国のハリス・グラフィック社による買収を経て、米国のゴス・インターナショナル社に編入された。

3 日本の新聞草創期

日本で新聞が生まれる経緯を振り返りながら、マリノニ型輪転機が導入される時代背景を概観したい。

日本では江戸時代に、火事や心中といったニュースが木版で紙に印刷されて配られた。街頭で大きな声で読みながら売られたため、「読み売り」という呼び名がついた。江戸時代後期の庶民の貴重な情報源となった⁽²³⁾。

江戸末期になると、列強諸国が日本に押し寄せ、長崎や横浜の外国人居留地で英字新聞が発行されるとともに、1867年の大政奉還後は日本人による新聞も目立つようになった。有名なのは、洋学者柳河春三が1868年に創刊した中外新聞で、国内と海外事情を伝えた。ただ、平均の発行部数は200部程度で、当時のプティ・ジュルナル紙の発行部数の1000分の1に過ぎなかった。

この頃の印刷技術に貢献したのが、通詞（通訳）の本木昌造だ。幕末の長崎で、オランダからの技術を基に活字製造を行い、1855年に活版印刷所を設立した。明治改元の翌1869年には、日本初の民間活版業として、長崎に新町活版印刷所を創設し、横浜や大阪にも支所を設けた。この横浜支所で印刷されたのが、1871年に創刊された横浜毎日新聞だ。木版の西洋紙1枚刷りで、現在の新聞の原型と言われる。

以後、地方紙も含め、様々な新聞が創刊される。種類は大新聞（おおしんぶん）と小新聞（こしんぶん）に二分されていた。大新聞は、大きな紙面で、インテリ層向けに、事件より論説を中心に伝えた。多くの場合、政党の機関紙的な性格を持ち、政論新聞とも呼ばれた。東京日日新聞（創刊1872年）や郵便報知新聞（1872年）などがあり、政府寄りと反政府寄りに分かれた。これに対し、小新聞は、タブロイド判で、大衆向けに社会の動きを仮名付きで伝え、ユーモアとゴシップにあふれた記事を掲載した。読売新聞（1874年）や朝日新聞（1879年）がその代表格だ⁽²⁴⁾。

読売新聞は、英語辞典を発行していた日就社（横浜）の子安峻社長によって創刊された。印刷業「博聞社」の古井多助を引き抜き、1876年に活版印刷の紙型鉛版刷り（4ページ）に成功し、部数を増やした。鉛版はシリンダの周囲に簡単に装着することが可能で、少部数には有効な印刷方法だった⁽²⁵⁾。読売新聞は、手刷が主流の新聞業界で、印刷に初めて動力を利用したと言われており⁽²⁶⁾、1877年には2万5000部を発行し、売上部数が最多となった⁽²⁷⁾。

この時代の新聞業界を特徴付けるのは激しい競争だろう。朝夕刊のセット販売が始まり、人気の相撲の解説記事を掲載するといったサービス合戦が熱を帯びた。大阪を拠点にしていた朝日新聞は読売新聞の紙型鉛版を研究し、1885年に蒸気動力の印刷を開始した⁽²⁸⁾。また、朝日新聞が1888年、「めざまし新聞」を買収し、東京朝日新聞として創刊すると、東京日日、報知、朝野など16社は1890年3月、東京の有力5売店に東京朝日新聞を売らないよう圧力をかけた。また、各社は懸賞を出したり、俳優の人気投票を行ったりして、他紙との差別化を図った。

新聞各社の競争は、戦争報道を巡って激しくなり、それが部数増につながっていく。日清戦争や日露戦争の戦況を知りたい民衆は、新聞のある商店に殺到した。このため、各社は戦況の速報で競い合い、報道内容も論調中心から報道中心に質的な変化をとげていく。号外が配られたのもこの時期だ。例えば、東京朝日新聞の誕生で、朝日新聞から名称を変えた大阪朝日新聞の経営担当、上野理一は1897年、「報道ノ迅速記事ノ斬新ヲ期スル為メ従来ノ八頁ヲ二分シテ其第一版ハ従来ノ如ク配達シ其二版ヲ午後一時ヲ期シ当地ヲ発送シ了ル」と1日2回の配達を提案した⁽²⁹⁾。

新聞における報道の重要性が高まり、速報性が問われるにつれ、短時間での大量印刷が必要となった。4ページ新聞を1時間に1500部しか刷れない平版ロール印刷機では対応できなくなった⁽³⁰⁾。印刷の技術革新が、競争の明暗を分ける状況になっていた。

4 マリノニ型輪転機の導入とその波紋

1890年11月に第1回帝国議会の開催が予定された。内閣官報局長だった高橋健三は、議事速記録などを盛り込むと官報の印刷部数が増えるため、高速の輪転機の導入を検討する。従来の印刷機のスピードでは印刷部数が限られたため、高橋は欧米機種を選定に入る。こうした中、高橋は東京・上野の皇室博物館を訪れ、陳列されていた英紙タイムズの円形の鉛版を見学した。それを輪転機で印刷しているのがマリノニ社であることを知り、購入を思い立った⁽³¹⁾。その後の調査で、マリノニ型輪転機が外国機で最も優れているとの結論を得た。高橋は1890年2月、官報局印刷課長の高須誠之輔を連れ、フランス船オクス号 (Oxus) に乗り、横浜から出港した。

この出張に同行したのが、大阪朝日新聞印刷部の津田寅次郎だった。大阪朝日新聞の当時の発行部数は1日3万5000部を超え、平台印刷機による印刷能力は限界に達しようとしていた。上野は米国製の印刷機を検討していたが、社長の村山龍平は1890年初頭、親しくしていた高橋から、政府がマリノニ型輪転機の導入を検討していると聞いた。村山は、同じ機種を購入を決め、極秘に津田の派遣を決めた。村山は津田に対し、輪転機の運転を学び、使用に適した巻き取り紙を調べ、値引きの交渉を行うよう命じた⁽³²⁾。

マルセイユ経由でパリに到着した一行は、マリノニ社を訪問した。津田と高須は、マリノニ社の工場で輪転機の取り扱い方法についての研修を受けた。さらに、日本から持参した巻き取り紙の紙型で鉛版を製造し、試し刷りする

と、「もの見事に印刷ができた」ため、マリノニ型輪転機を発注することになった⁽³³⁾。

購入の最大の理由は、「輪転靈動機」と呼ばれるほどの驚異的な印刷の早さだった⁽³⁴⁾。マリノニ型は、新聞紙を1時間に1万部以上刷ることが可能で、自動裁断装置も備えていた。8ページの新聞を1時間に3万部印刷できるとも宣伝された。当時、最新鋭と言われた大阪毎日新聞の円筒式印刷機の2倍の速さ、通常のロール機の6倍以上の速さだった。マリノニ型輪転機は電力を使用しており、蒸気機関を使用していた従来機とは安定性も違った。

結局、内閣官報局は2台を購入し印刷局に設置した。日本においてマリノニ型輪転機が初めて導入されたもので、懸念された巻き取り紙の国内調達も和紙原料での製造が可能だと分かった。津田も1機を注文した。

一行は1890年8月、マルセイユを出港し、9月18日に神戸に到着した。津田が購入した輪転機は、大阪朝日ではなく、東京朝日に置かれた。国会が開会した後、議事録を東京で印刷し、大阪に輸送するためだった。

東京朝日新聞は1890年9月27日付の1面トップで、マリノニ型輪転機を導入する社告「愛読者諸君」を掲載した。「議会開設に付て先づ第一に世人の属望して措ざるものは其精確なる議事筆記なるべし。我社はつとに此事に用意あり」と導入の背景を説明した上で、「我社はさきに仏国に注文して最新至巧のマリノニ輪転印刷機を買入れ、且特に社員を派遣して其印刷術の伝習を受けしめ、社員及び現品共既に無事安到着して本社に在り。是れ実に最新無類の印刷機械なる」⁽³⁵⁾と強調した。社告は27日以降、4日間に渡っており、社の命運をかけた取り組みだったことがうかがえる。他社はこの計画を知らず、驚くばかりだったという。日本で初めて新聞が直接的生産過程で道具から機械に移行した⁽³⁶⁾ことを意味する。

マリノニ型輪転機は話題をさらった。1890年11月、地方の販売店店主が上京して新しい輪転機を視察した。朝日の社内では、マリノニ係が4人付き、「人間の代りはいくらでもあるが、マリノニの代わりはないんだぞ」と言われ、丁重に扱った⁽³⁷⁾。1890年11月に帝国議会が開会すると、東京朝日に設置されたマリノニ型輪転機は1日に約10万枚の傍聴筆記を連日印刷した。通常の印刷機であれば、印刷時間を考慮して午後6時頃が締切だったが、マリノニ型輪転機の導入で、議事終了まで締切時間を遅らせることができたという。輪転機の「驚異的な速度」は号外発行を可能にし、1892年にマリノニ型を導入した大阪朝日新聞は日清戦争の宣戦布告から講和条約調印までの8か月余

で号外を146回発行した⁽³⁸⁾。マリノニ型輪転機の投入は、報道の速報性を重視する時代の到来を可能にし、新聞高速印刷時代の幕開けとなった⁽³⁹⁾。

その後、マリノニ機を購入する新聞社が相次いだ。「印刷製本機械百年史」や「大蔵省印刷局百年史」によると、大阪毎日新聞が1893年、東京日日新聞や中外新聞が1895年、報知新聞が1896年にそれぞれ導入した。やまと新聞、都新聞、日本新聞もこれに続き、ライバル紙が雪崩を打った形だ。

朝日新聞と競う大阪毎日新聞は、この輪転機を「とほうもない性能を持つ機械」として、当時の資本金の16%にあたる「8000円近い大金を投げ出しておの買物」をした⁽⁴⁰⁾。最大の発行部数となった朝日新聞にならぬ、1893年12月24日付紙面で社告を掲載し、「世界最新式の輪転器械は既に神戸に着したれば（中略）本社新聞の速達は一層すること受合なり」⁽⁴¹⁾と宣伝した。1894年3月1日付の紙面から輪転機が使用されると、ページ増が可能となり、「人気はますます高まり、読者はふえて行った」⁽⁴²⁾という。そして、大阪朝日新聞と大阪毎日新聞の競争は「取材、紙面企画、販売において本格化した」⁽⁴³⁾のだ。

マリノニ機導入の流れは地方紙にも広がり、福岡日日新聞が1901年に投入し、北海道新聞も主力印刷機として使用した⁽⁴⁴⁾。

当時、緊迫する東アジア情勢に対する民衆の関心は高く、日清戦争前に約80社だった新聞社数は1897年には約120社に増加した⁽⁴⁵⁾。競争を勝ち抜くためにも印刷能力の増強は求められ、朝日は関東圏や近畿圏で販売網を拡充できた。生産力の増強が、シェア拡大の強力な武器となったのだ。

主要国では当時、輪転機の開発が進んでおり、例えば、米国のアール・ホー社の輪転機は、マリノニ型よりも性能が良いとの指摘もあった。だが、日本の新聞に特有だったページ間挿入の「欄外記事」の印刷で、マリノニ機の方が優れていた。さらに、構造が簡素で取り扱いが容易だったこともあり、マリノニ型は半世紀にわたり新聞印刷の「王座」を占めた⁽⁴⁶⁾。

20世紀に入ると、マリノニ型輪転機の改良が本格化する。輸入品は破損や故障で部品の取り換えが困難だったためだ。大阪朝日新聞はマリノニ型を手本に国産化を目指し、社内に工場を建設し、津田が製作主任となり、1904年に朝日式輪転機を完成させた。朝日式は地方紙に販売された⁽⁴⁷⁾。

三田製作所（現：東京機械製作所）の石川角蔵は、マリノニ型輪転機を2年間かけて改良し、1906年に石川式新聞輪転機を完成させた。3色のカラー印刷が可能で、1時間に2万～2万5000部の印刷能力があり、マリノニ機を凌

駕する第1号の国産輪転機とみなされている⁽⁴⁸⁾。九州日报社（現・西日本新聞）、神戸又新日報、報知新聞、信濃毎日新聞などに採用され、マリノニ機が国内の印刷産業を活性化させたとみることもできよう。

東京・神田に印刷器機製作所を設立した金津平四郎の二男、金津金蔵は、船の修理業を経て、1889年に東京・京橋で印刷機械の製造を開始した。1909年には、河北新報社からの注文を受け、マリノニ型輪転機の国産版を製造した。金津式と呼ばれた輪転機はその後、やまと、都、日本、九州日日、静岡民友、秋田魁、名古屋、福島民報、金沢など各紙に納入された⁽⁴⁹⁾。王子製紙が巻き取り紙を生産し、国内で自給できる態勢となった。

マリノニ型輪転機とその改良機が日本の新聞業界にもたらしたのは、総発行部数の急増だ。新聞の1日あたりの総発行部数は1893年ごろ、約35万部だったが、1904年には約163万部となり、5倍近い伸びを示した⁽⁵⁰⁾。

また、全国紙の地方版の発行にも貢献し、主要紙の全国展開を助けた。大阪毎日新聞は1894～95年、タブロイド版2ページの日刊紙「京都滋賀附録」と、週刊紙「堺附録」をそれぞれ地域住民に向け折り込んだ。このうち、「堺附録」には広告出稿が多く、収益増につながった⁽⁵¹⁾。1889年7月の東海道線開通により、都市部中心だった新聞の地方への配達も可能となった。

さらに、マリノニ機によって夕刊発行も本格化した。報知新聞は1907年、マリノニ機5台を導入して印刷能力を増強し、速報性を充実させるため、夕刊の発行を開始した⁽⁵²⁾。

結果として、新聞は世論に大きな影響を与えることになった。例えば、日露戦争後の講和条約で、ロシアから賠償金を取れなかったとの報道が伝わると、激高した市民が、講和賛成の国民新聞を襲撃する事件に発展した。さらに、マリノニ型輪転機を導入する新聞と導入しない新聞との格差は広がり、1912年に大正時代に入ると、東京の新聞は5大紙（東京日日、東京朝日、国民、報知、時事）が市場を独占するようになる。

だが、日本を含む世界各地の輪転機の開発競争により、マリノニ型の優位が次第に薄れていく。大阪毎日新聞は1922年、米国のアール・ホー社が改良した高速輪転機を3機納入した。マリノニ機を大幅に上回り、1時間に7万部を超える印刷能力が決め手となった。東京日日新聞も増設した社屋にアール・ホー社の輪転機を2機設置した。

マリノニ型は1923年の関東大震災で焼失したこともあり、新たな機種を求める各社の動きは加速した。大阪朝日新聞は1925年11月、東京機械がアール・

ホー社の製品を国産化した輪転機を設置し、1時間に8万部を印刷し、マリノニ型の後継機とした。

新聞印刷はその後、米国やドイツの企業の輪転機が導入され、活版印刷から平版のオフセット印刷へと発展していく。マリノニ社製は日本の新聞業界で主流ではなくなったが、新三菱重工（現：三菱重工）が1960年、マリノニ社と技術提携契約を結び、オフセット印刷を含む幅広い協力を進めるなど⁽⁵³⁾、その後も日本の印刷業界に一定の貢献を果たした。

おわりに

マリノニ型輪転機はフランスのみならず、日本でも、大量印刷を可能にする新聞革命をもたらした⁽⁵⁴⁾。帝国議会での審議や日清戦争の戦況を知りたい市民により新聞需要が高まる中、大阪朝日新聞と姉妹関係だった東京朝日新聞を始めとして各紙がこの機器を導入したことで、新聞の総発行部数は飛躍的に増加した。マス・コミュニケーションを機械的手段による情報の大量伝達と定義すれば、マリノニ機は日本でマスコミを誕生させ、新聞の大衆化を促したと言ってもよい。

結果として、新聞は大正デモクラシーの時代を演出する。「憲政擁護」「閥族打破」「言論の自由の擁護」の要求で、中心的な役割を果たしたのが新聞だった⁽⁵⁵⁾。新聞は、憲政擁護や汚職疑惑の追及で、桂太郎、山本権兵衛両内閣を退陣に追い込み、影響力の大きさを示した。そうした新聞を発行したのはマリノニ機であり、影でデモクラシーを支えたと指摘できるだろう。

新聞をつくるのは、「人」と「機械」だ⁽⁵⁶⁾。徳富蘇峰ら有能な書き手を高待遇で迎え入れた朝日新聞は、マリノニ型輪転機の導入で、発行部数を急増させて販売競争に勝ち抜いた。毎日新聞も、同じ手法で成長した。マリノニ型輪転機の導入に積極的だったこの2紙がその後、全国紙に発展した歴史を考えると、新たな科学技術への挑戦が、新聞の生き残りの条件であることを示唆している。

注

- (1) Eric Le Ray, «Hippolyte-Auguste Marinoni, l'un des fondateurs de la presse moderne (1823-1904)», *Documentation et Bibliothèques*, 2005 (n° 51), p.155.
オンライン情報の最終確認日は2020年12月5日（以下同じ）。

- (2) Jean-Noël Jeanneney, *Une histoire des médias des origines à nos jours*, Seuil, 2000, pp.26-27.
- (3) Jacques Guihaumou, «Claude Labrosse et Pierre Retat, Naissance du journal révolutionnaire : 1789 [compte-rendu]», *Annales historiques de la Révolution française*, 1990, p.126.
- (4) 寺田元一『「編集知」の世紀 十八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と「百科全書」』、日本評論社、2003年、59, 61頁。
- (5) ピエール・アルベール『新聞・雑誌の歴史』、白水社、2020年、37頁。
- (6) Gilles Feyel, «Presse et publicité en France (XVIIIe et XIXe siècles)», *Revue historique*, 2003/4 (n° 628), p.857.
- (7) Kupferman Fred, Machefer Philippe. «Presse et politique dans les années Trente : le cas du Petit Journal», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 1975 (tome 22 n° 1), p.7.
- (8) ピエール・アルベール、前掲書、62頁。
- (9) Eric Le Ray, *op. cit.*, p. 151.
- (10) Société de savants et de gens de lettres, *Grande encyclopédie : Inventaire raisonné*, Société anonyme de la grande encyclopédie, 1885-1902, p. 191.
- (11) Musée des arts et métiers, *La presse rotative à plieuse de Marinoni*, p2.
- (12) Eric Le Ray, *loc. cit.*
- (13) Pascal Fouché (sous la direction de), *Dictionnaire encyclopédique du livre*, Ed. du Cercle de la librairie, 2005, p. 888.
- (14) Société de savants et de gens de lettres, *loc. cit.*
- (15) 一色忠雄「印刷界の大恩人 マリノニー氏立志談」、『印刷雑誌』、1904年、117頁。
- (16) Pascal Fouché, *loc. cit.*
- (17) Musée des arts et métiers, *loc. cit.*
- (18) Paul Augé (sous la direction de), *Larousse du XXe Siècle en six volumes*, Librairie Larousse, 1931, p. 694.
- (19) Françoise Cibiel (sous la direction de), *Journal de la France et des français : Chronologie politique, culturelle et religieuse de Clovis à 2000*, Gallimard, 2001, p. 1636.
- (20) Janine Ponty, «Le Petit Journal et l'Affaire Dreyfus (1897-1899) : analyse de contenu», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 1977 (tome 24 n° 4) , p.643.
- (21) 朝日新聞百年史編修委員会『朝日新聞社史 明治編』、朝日新聞、1990年、246頁。
- (22) Bernard Oudin, «L'Anar et le canard», *Les cahiers de médiologie*, 2002 (n° 13), p.103.
- (23) メディアポ「日本の新聞のはじまり」、東建コーポレーション、www.homemate-research-newspaper-office.com/useful/12598_facil_001/
- (24) 佐藤毅「マス・コミュニケーションの成立:わが国のばあいを中心として」、『社会労働研究』11巻4号、1965年、46頁。
- (25) 印刷製本機械百年史実行委員会『印刷製本機械百年史』、全日本印刷製本機械

- 工業会、1975年、20頁。
- (26) 佐藤毅、前掲論文、39頁。
 - (27) 春原昭彦『日本新聞通史』、新泉社、2003年、42頁。
 - (28) 佐藤毅、前掲論文、40頁。
 - (29) 山本武利『現代の社会科学 近代日本の新聞読者層』、法政大学出版社、1981年、128頁。
 - (30) 春原昭彦、前掲書、73頁。
 - (31) 大蔵省印刷局『大蔵省印刷局百年史 第二巻』、1972年、551～552頁。
 - (32) 朝日新聞百年史編修委員会、前掲『朝日新聞社史 明治編』、244頁。
 - (33) 大蔵省印刷局、前掲書、552頁。
 - (34) 印刷製本機械百年史実行委員会、前掲書、34頁。
 - (35) 朝日新聞百年史編修委員会、前掲『朝日新聞社史 明治編』、245頁。
 - (36) 山本武利、前掲書、138頁。
 - (37) 朝日新聞百年史編修委員会、前掲『朝日新聞社史 明治編』、246頁。
 - (38) 濱田信夫「日本の新聞産業を牽引した企業家活動 村山龍平と本山彦一」、『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター』、2012年、7頁。
 - (39) 大蔵省印刷局、前掲書、245頁。
 - (40) 毎日新聞百年史刊行委員会『毎日新聞百年史 1872→1972』、毎日新聞、1972年、69頁。
 - (41) 前掲書、453頁。
 - (42) 前掲書、454頁。
 - (43) 濱田信夫、前掲論文、5頁。
 - (44) 北海道新聞『北海道新聞五十年史』、1993年、187頁。
 - (45) 東京機械製作所 輪転機製造開始100年委員会編『輪転機のあゆみ 輪転機製造100年記念誌』、東京機械製作所、2006年、53頁。
 - (46) 毎日新聞百年史刊行委員会、前掲書、453頁。
 - (47) 朝日新聞百年史編修委員会『朝日新聞社史 資料編』、1995年、335頁。
 - (48) 東京機械製作所 輪転機製造開始100年委員会編、前掲書、60頁。
 - (49) 古谷昌二「活版印刷機の製造体制」、『平野富二：明治産業近代化のパイオニア』、2019年、hirano-tomiji.jp/archives/2430
 - (50) 春原昭彦、前掲書、90頁。
 - (51) 毎日新聞百年史刊行委員会、前掲書、69頁。
 - (52) 山本文雄「日本新聞界における朝夕刊制の発展について」、『新聞学評論』、1961年、114頁。
 - (53) 東京機械製作所 輪転機製造開始100年委員会編、前掲書、119頁。
 - (54) 濱田信夫、前掲論文、5頁。
 - (55) 前坂俊之「日本の新聞ジャーナリズム発展史」、『前坂俊之オフィシャルウェブサイト』、2009年、www.maesaka-toshiyuki.com/war/30448.html
 - (56) 朝日新聞百年史編修委員会、前掲『朝日新聞社史 明治編』、262頁。

1878年パリ万国博覧会における日本の意図に関する一考察

—開拓使による鮭缶詰出品を例に—

樋口いずみ

はじめに

19世紀後半の欧米諸国で開かれた万博（以下、万博）は、単なる文化イベントではなく、各国の思惑が交差した場でもあった。勿論、本稿で分析する1878年パリ万博もその一つである。

1878年は、国外では日本の工芸品等への関心が高まり、国内では諸制度や産業等の近代化が進み始めるなど、日本を取り巻く状況が徐々に変化しつつある岐路の時期にあったともいえる。こうした時期において、どのような意図をもって日本は万博という国際舞台に臨んだのだろうか。

これまで、日本の参加規模がウィーン万博やフィラデルフィア万博と比較して小さかったことなどから、当万博の参加に関してはあまり検討されることがなかったが、近年、ジャポニズムや文化交流への関心から、その参加意図も徐々に明らかになりつつある⁽¹⁾。

しかしながら、こうした研究は対外的視点で論じられるがゆえに、「日本」というひとつの括りでその意図が検討され、特に前田正名の取り組みを中心として、日本政府の意図を結論付けることが多い。しかし、「日本」をより具体的に検討すると、日本政府の意図の実態は、多層構造になっていたのではないかと考えられる。日本政府はこの万博に博覧会事務局員を派遣するだけでなく、別途、文部省から官員を派遣するなどの二重構造がみられる⁽²⁾。また、後述するが、博覧会事務局内でも当事者の意識には違いがあったのである。

本稿は、こうした問題意識に基づき、1878年パリ万博の日本政府の意図を明確にする試みの一環として、開拓使出品の鮭缶詰に着目し、それをめぐる

活動から博覧会事務局当事者の意図の一側面を明らかにする事を目的とする。

1869年に設置された開拓使は明治政府の殖産興業政策に対応し、北海道内自給体制の確立と輸出産業の創出を方針⁽³⁾に、1871年以降、次々に官営工場を誕生させた。パリ万博の前年である1877年に設立された石狩缶詰所もそのひとつであり、後に詳述するが、1878年パリ万博においてはここで生産された鮭缶詰が出品されている。これまで、本万博の意図に関しては、「産品」として工芸品が出品されたことにスポットが当てられてきたが、本稿で示すように、この万博では海外の技術を導入して「産品」として日本で生産された缶詰もまた出品されたのである。

殖産興業政策の下、「産品」として生産された出品物が、万博を通して対外的に工芸品を「産品」として売り出そうとする博覧会事務局内でどのように扱われたのか。本稿では、開拓使出品の鮭缶詰をめぐる動きを元に、その実態を明らかにしたい。

1. 仏国博覧会事務局とその参加意図

1878年パリ万博の日本の事務局である仏国博覧会事務局はどのような意図を持ってこの万博に参加したのか。参加に至るまでの経緯については岩壁義光氏⁽⁴⁾が既に明らかにし、大久保利通（内務卿）、松方正義（大蔵卿兼内務省勧農局長）、前田正名（万博派遣時、内務省御用掛）の三者が事務局運営の中枢を成していたことを指摘している。参加意図については既に筆者が松方と前田の人物像と出品物によってフランス側の反応と対比させながら明らかにした。よってここでは、簡単に仏国博覧会事務局の概要を示した上で、拙稿を元に松方と前田の万博時の取り組みを中心に彼らの意図を確認する事とする。

(1) 仏国博覧会事務局

パリ万博参加を決定後、政府は内務省管轄の仏国博覧会事務局を設け⁽⁵⁾、1877年3月22日付けで上野公園内に開設した⁽⁶⁾。総裁に大久保、副総裁に松方を配し、内国勧業博覧会事務局を兼務していた。

当初、現地の日本のパリ万博事務窓口は、仏国公使館の中野健明が担っていた⁽⁷⁾が日本からの事務局員の到着後パリ市内にも仏国博覧会事務局が設け

られた。この事務局には、日本から副総裁・松方の他、事務官として前田、石原豊貫（内務一等属）、久保弘道（内務省御用掛）、御用取扱・平山成信（外務一等書記生）、谷謹一郎（大蔵三等属）、諏訪秀三郎（陸軍省十二等出仕）、成島謙吉（内務六等属）、兼松直綱（内務省御用掛）、三田佑（内務省御用掛）、大橋靖（内務省御用掛）、河原徳立（内務省御用掛）の12名が派遣された。また、仏国公使館在勤であった鮫島尚信（特命全権公使兼博覧会御用掛）、中野健明（一等書記官）、鈴木貫一（事務取扱）、河上房申（一等書記生兼事務取扱）の4名のほか、遠野寅亮、山田寅吉など当時フランスに在国していた7名もそれに加わっている⁽⁸⁾。現地事務局が開設されてからは、対外事務の関係上、松方は総裁を名乗り、鮫島が総裁心得に、前田が事務官長に任命された⁽⁹⁾。

万博の11月10日閉場後は、15日に石原等5名が帰国し⁽¹⁰⁾、翌年3月1日には松方が帰国⁽¹¹⁾、現地の仏国博覧会事務局は3月31日限りで廃止された⁽¹²⁾。国内事務局は1879年2月に本省内に移転し⁽¹³⁾、残務については、内務省内の博覧会御用掛に引き渡されたようである⁽¹⁴⁾。

(2) 仏国博覧会事務局の意図—松方正義と前田正名—

前述のように仏国博覧会事務局の中枢を担っていたのは大久保、松方、前田の三者であり、当時内務卿であった大久保の殖産興業政策がこの万博の参加意図にも影響を与えていると考えられるが、実際に実務にあたった松方と前田はどのような意図でこの万博に臨んだのであろうか。

万博に際して松方が力を注いだ点には以下の二点が挙げられる。

一つは、日本展示場入り口に日本地図や官省、学校などの統計表等を掲げたり、日本の歴史を仏語でまとめた“HISTOIRE DU JAPON”の編纂に特に力点を置いたことである。これについて松方は、口述したものを纏めた『侯爵松方正義卿實記⁽¹⁵⁾』の中で、その目的は「獨立自主ノ帝國」であることを西欧社会に「諒解」させることにあったとしている。

二つ目は、会期中にフランス国内および欧州各国に赴き、「文物制度農商工業財政経済交通運輸等ノ實況」の視察を積極的に行ったことである。その目的について、『侯爵松方正義卿實記』では「将来我國ニオケル各般ノ私設ニ貢献スル所アランコトヲ期セラル」と述べている。

つまり松方には、万博を機に近代国家であることをアピールすると同時に、西欧社会の文物制度を吸収して国内へ還元しようとする意識があったのであ

る。これは後に外発的産業の育成を推進した松方の思想とも一致する。

一方、前田が当万博で力点をおいた事は次の二点であったと考えられる。

一つは日本の植物の出品である。日本は日本展示場の他に会場内に日本庭園を造り、日本から持ち込んだ樹木を移植した。これらの樹木は前田自らが出品人となり、出品された出品物でもあった。

二つ目は、工芸品の出品である。前田は日本での出品準備の際「欧米の実用に適する美術工芸を振作することに努力」したと、前田の口述を記した『自徐傳⁽¹⁶⁾』で述べている。そしてその工芸品を「実用」とする試みの一つとして、会期中に自ら仏語で脚本を執筆した『ヤマト』と題する演劇を上演し、その中で工芸品の使用法を実演してみせた。前田は『自徐傳』の中で万博前の滞仏中に「最も苦心」したのは「日本は宗教もなく、野蛮なり、日本は支那の属国なり」と「恥かshめる、こと」であったとし、この思いがこれらの活動の根底にあったと説明している。

すなわち、前田のこれらの活動からは、松方同様に国威を示す事がその基盤にあり、在来のものを「実用」として西欧に定着させる事で、万博を将来の輸出産業振興に資する場としようとした事がわかる。これは後に地方在来産業の近代化を以って輸出産業振興を目指した前田の思想⁽¹⁷⁾の現れでもある。

このように松方と前田という二人の当事者の意識を辿ると、博覧会事務局の意図には当時の直輸出振興型の殖産興業政策が土台にありながら、実務にあたった当事者の意識においてはその方策について意識に違いがあったといえる。すなわち、博覧会事務局内には、これまでの近代化の成果をアピールしながらさらに国内の外発的産業に基づく輸出政策を振興していこうとする松方の意図と、国内在来産業育成に基づいた内発的輸出政策を目指していこうとする前田の意図が並存していたのである。

既に拙稿でも指摘したように、こうした二つの意図は万博会場においては前田の意図が前面に押し出され、受け止められた。これは会場における実演展示や陶磁器の出品といった点からも明らかである。また、現地での新聞報道等でも日本に関する記述の殆どが総裁・松方よりも事務官長・前田の活動を紹介していることから窺える。在仏経験の長かった前田は仏語に堪能であり、既にフランス社会にネットワークを築いていた事も考慮すれば、対外的に前田の意図が前面に表れていたことは自然な流れでもある。

しかしながら、万博後の国内の産業は松方の志向する外発的産業の振興が

進められる。故に前田の意図は国内的には矛盾を抱えているとも言わざるを得ない。こうした点を考えると、この万博の参加においても、在来産業に基づく出品以外についても何らかの活動があったのではないかと推察される。

本章以降は、対国内的視点で博覧会事務局の意図を検討するために、殖産興業政策の下に生まれた開拓使による出品に着目し、検討をすすめていく。

2. 開拓使と缶詰・万国博覧会

本章では、次章で検討を行う開拓使の鮭缶詰出品の背景として開拓使と万博出品の概要及びパリ万博に至るまでの開拓使と缶詰の関係をまとめたい。

(1) 開拓使と万国博覧会参加

明治政府が初参加した1873年のウィーン万博から既に開拓使による出品がみられる。この万博を機に博覧会事務局には「北海道の鉱物・動植物・アイヌ民族資料など約1200点が集められ、このなかから157点⁽¹⁸⁾」が万博会場内の日本の展示場内に設けられた「北海道産物」コーナーに展示された。三浦泰之氏によれば、この展示には「北海道が日本の「内国」であることを万国博覧会という国際舞台で強調しようという意図⁽¹⁹⁾」があったという。

次に日本は1875年にメルボルン植民地間博覧会にも参加している。ただし、この博覧会への出品は民間のみであったので開拓使は関与していないとみられる。よって、次に開拓使と万博の関わりが確認されるのは1876年のフィラデルフィア万博である。博覧会事務局による『米国博覧会報告書⁽²⁰⁾』の目録によればこの万博には、開拓使より玉蜀黍、薫製松魚、薫鹿腿、繭生糸が出品されたことが確認される。また、加藤克氏は、これらの他にも礦石、毛皮類、馴鹿角などが開拓使から出品されたが、勸農局の出品物として扱われたために『米国博覧会報告書』に開拓使出品の記載がないことを指摘している⁽²¹⁾。ここで注目されるのは、この万博の出品物に前回の出品時にみられたアイヌ関連出品物が見られず、生産品が中心になっていることである。また、これらの出品物は「北海道産物」のコーナーが設けられることなく日本の出品物の一つとして万博会場内の農業館に展示されたものと思われる。つまり、この万博では、開拓使の出品物には北海道が「内国」であることを強調する意図はなく、「内国」であることを前提に日本の生産品としての出品を博覧会事務局は開拓使に望んだといえる。

こうした方針は、本稿で検討する1878年パリ万博でもより強く表れている。『明治十一年仏国博覧会出品目録⁽²²⁾』によれば、北海道実測図や地質総論、報文等、砂金や銅等、鱈の肝油、毛皮、生糸、博多織等、鮭等の缶詰、繭、養蚕器具などであり、前回に比べて多岐に渡る。当万博においてもアイヌに関する出品は見られず、生産品とそれを補足する資料が前回よりも大きな規模で出品された。また、この万博では出品人ごとにまとめて展示が行われたが、ウィーン万博にみられたような「北海道の産物」コーナーを特別に設けてはいなかった。これらの出品物は日本展示場の一室である農業館の勧業局の展示の一角に設けられたスペースに展示されたものと思われる⁽²³⁾。つまり、1878年パリ万博においても、開拓使の出品は、日本の生産品の一つとして出品されることを前回以上に期待されていたといえる。

こうした開拓使の万博参加の背景には、開拓使長官・黒田清隆の殖産興業振興の下に行われた官営工場の設置があると思われる。次節では、本稿で取り上げる缶詰と開拓使の1878年までのかかわりについてみていきたい。

(2) 開拓使と缶詰

前述のように、開拓使は明治政府の殖産興業政策に呼応する形で北海道各地に官営工場を設置した。パリ万博の前年である1877年、石狩に開設された缶詰所もそのひとつである。

この石狩缶詰所は、1876年のフィラデルフィア万博に派遣された事務官・関沢明清（勲業寮六等出仕）⁽²⁴⁾が現地の缶詰工場を視察し、帰国後、缶詰所を作るよう内務卿・大久保利通に建議したことを一つの契機として設立された⁽²⁵⁾官営缶詰工場であった。1871年の渡米時に米国内で生産される缶詰が国内はもとよりヨーロッパへも輸出されている事に注目した開拓使長官・黒田は、鮭の缶詰の日本国内での生産を考えていた⁽²⁶⁾。故に、缶詰事業は開拓使によって熱心に取り組まれた事業の一つであり、石狩缶詰所の他に、1878年7月に別海缶詰所、10月に美々缶詰所、1879年7月に厚岸缶詰所、8月に紗那缶詰所が建設されている⁽²⁷⁾。

石狩缶詰所には、関沢がニューヨークで購入した製缶機械一式が設置され、米国から招いたU.S.トリートとW.S.スウェットの指導の下1877年10月10日に50尾の鮭で缶詰製造を行い、操業を開始した⁽²⁸⁾。生産は試験的なものではあったが、技術の向上と同時に海外を中心に販路の拡大が目指された。1878年パリ万博は、こうした流れの中で行われたイベントであったのである。

3. 1878年パリ万博と開拓使による鮭缶詰の出品

開拓使の鮭の缶詰は1878年パリ万博に於いてどのように扱われたのか。ここではパリ万博出品に際しての鮭缶詰を巡る動きを、博覧会会期中と会期後の動きに分けて辿ることで、鮭缶詰の出品が持つ意味について考察したい。

(1) 鮭缶詰の出品をめぐる動き

パリ万博に関する事務は1878年6月までは開拓使東京出張所勸業課仏国博覧会出品係が、その後は札幌本庁の物産局博物課が担当した⁽²⁹⁾。当万博への出品物は、本庁、函館支庁、東京出張所によるものに分けられるが、その大部分は本庁によって新たに収集された生産品であり、出品のために1877年11月頃から1878年5月頃にかけて玄武丸や品川丸、玄龍丸で横浜に輸送されたとみられる。本稿での検討対象である鮭缶詰は、開拓使による出品目録⁽³⁰⁾によれば、すべて石狩缶詰所を管轄する本庁物産局精煉課による製造であった。前述の通り、石狩缶詰所は1877年10月に開業しており、操業まもない石狩缶詰所で生産された鮭缶詰がフランスに運ばれ、出品されたといえる。博覧会事務局による『明治十一年佛国博覧會出品目録』によれば、鮭缶詰は第7大区第72小区に出品された。先述のように、開拓使による出品物は日本展示場内の一室に設けられた農業部のスペースに勸農局の出品物と共に展示されたが、鮭缶詰もその一つとして展示されたと考えられる。つまり鮭缶詰は日本による生産物の一つとして扱われたのである。

こうした動きと平行して、会期中、開拓使の鮭缶詰は、松方を通して現地での販路開拓の道が探られた。

まず、開拓使は1878年4月、パリ滞在中の松方へ鮭缶詰数十箱を送付した⁽³¹⁾。それに対し、松方は「明治十一年四月十八日」付で黒田宛に書簡⁽³²⁾を送った。そこには、試しに一箱を開封してみたところ「風味等聊カモ相変シ不申」の状態であったことを伝えると同時に、三井物産会社支店の備外国人がロンドンであれば売り捌く見込みがあると評価したことを伝え、「鮭ハ意外面白キ勢ニ聞込ミ候」として鮭缶詰への期待が記されている。

さらに松方はパリから東京の黒田宛に「鮭一罐三拾貳錢ニ賣レタ貳拾四罐入百箱送レ⁽³³⁾」という電信を4月7日に送っている。そして松方はこれらの缶詰をフランス国内やイギリスへの視察の際にも携帯した⁽³⁴⁾。

また、5月には、松方は三井物産支店備フランス人に鮭缶詰を品評させ、「改

良セハ販路開展スヘキノ見込アリ」として、食味や色合い、缶詰の大きさから缶面の化粧紙の記載内容や貼り方までのアドバイスを得ている⁽³⁵⁾。

このように、勸業政策の中で生まれた開拓使による鮭缶詰は、日本の生産品の一つとして出品され、博覧会事務局の松方を通して現地で積極的に販路開拓の道が探られた。ここで確認しておくべき点は、鮭缶詰が勸業政策の成果物であった点である。つまり、日本政府にとって、鮭缶詰は西欧諸国に対して近代国家であるというメッセージという意味合いを持つものであったといえる。そしてこの万博を通して西欧諸国に晒すことによってそのメッセージを発し、将来の販路開拓を模索するその思想は、先述した松方の意図と合致するものであり、それが開拓使の鮭缶詰をめぐる活動が松方を通して行われた理由であろう。つまり、先述した通り博覧会事務局の意図には松方と前田の二つの意図が併在していたが、鮭缶詰をめぐるこれらの動きは松方の意図に基づいた動きであったといえるだろう。

(2) 鮭缶詰出品のその後

これまで万博会期中の鮭缶詰を巡る動きを追ってきたが、次に会期後の動きをたどり、博覧会事務局の鮭缶詰出品の意図をさらに浮き彫りにしたい。

会期後の鮭缶詰をめぐるのは、以下の三点の動きが確認される。

一つは、出品後の缶詰の現地での処分をめぐる動きである。出品した缶詰類は閉場後に審査で開封したもの以外の残余分は見本として各所へ贈られたことが、博覧会事務局から開拓使へ報告されている⁽³⁶⁾。これは、費用の面から残余分を現地で処分する必要があるという事情もあろうが、各所への寄贈は西欧諸国に対して日本の近代性を示すメッセージであったとも捉えられる。

二つ目は、会期後の缶詰工場視察と製造機の購入である。松方は万博終了後、事務局員の成島と久保にフランス西部のル・クロワジックで鯛の缶詰製造を視察させ、工場で製造技術を習得させた⁽³⁷⁾。これは黒田からの依頼⁽³⁸⁾もあっての事と思われるが、その際、成島らは缶詰製造機一式を購入し、帰国後に開拓使とは別に、銚子に製造所を設けて試験製造を行っている⁽³⁹⁾。また、後にこの視察について開拓使から成島への聞き取りが行われ、報告されている⁽⁴⁰⁾。つまり万博の機会を缶詰生産技術向上の契機と捉えていたと言える。

三つ目は、現地での缶詰への反応を国内に報告していることである。博覧

会事務局による『佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書』では「開拓使ノ鮭甚タ好評ヲ得タリ其風味美ニシテ其肉堅ク殆ント生鮮ノモノ、如クナルハ米國産ニ勝レリ」とし、水分を調整すれば「必ス第一等ノ産物トナリ欧州ニ輸出スルモノ盛シナルニ至ヘシ」と報告している。この報告書自体は万博終了後に発行されたものであるが、同様の内容が『朝野新聞』（明治11年9月14日）でも紹介されており、現地での反応が直ぐに国内に持ち帰られ、国内に報道されたことがわかる⁽⁴¹⁾。

以上のように、万博終了後の鮭缶詰をめぐる動きをみると、日本が近代国家であるという西欧諸国に対するメッセージであったと同時に、販路を開拓しながら生産技術を向上させて国内産業を育成するために、視察や国内に対する報告が行われたことがわかる。つまり、外発的技術によって生産された鮭缶詰が近代国家の象徴として国外に示され、それと同時に国外に販路を求めようとする会期中にみられた博覧会事務局の意図が会期後においても確認され、さらに国内産業の振興にも繋げようとする姿勢が感じ取れるのである。

おわりに

本稿では開拓使出品の鮭缶詰を中心に1878年パリ万博をみてきたが、ここでは、この万博における日本の博覧会事務局の意図の中で、開拓使による鮭缶詰の出品の持つ意味について考えていきたい。

これまで述べてきたように、開拓使の鮭缶詰は、日本政府が進めてきた勸業政策の成果物であり、それは外発的技術によって作られた日本の生産品であった。つまり、鮭缶詰は、西欧諸国に対しては日本が近代国家であるというメッセージをもっていたと考えられる。さらに、こうして作られた鮭缶詰の輸出のための販路開拓の場としてこの万博捉えていたことも明らかになった。また、缶詰工場の視察や機械の購入、あるいは鮭缶詰の出品という形で欧米諸国に成果を示すことによって得た欧米諸国での反応の国内への報告を通して国内にフィードバックすることで、外発的産業を内発的産業へと転化させていこうとする姿勢が読み取れる。

こうした思想はこの万博で総裁を務めた松方の万博参加意図とも通じるものがあり、実際に松方はこの開拓使による鮭缶詰出品に深く関与した。

本稿の冒頭でも述べたように、1878年パリ万博に関しては、これまで、日

本の参加意図は、前田を中心とした取り組みを中心に考察され、工芸品を中心とした在来産業による産物の直輸出促進にあるとされることが多かった。しかしながら、これまで見てきたように、本万博においては松方の参加意図でもあった外発的産業による産物の直輸出促進の動きも並存してあったと言え、1878年パリ万博の博覧会事務局内の参加意図は二重構造になっていたと結論づけられる。

注

- (1) 主な論考に、拙稿「1878年パリ万国博覧会における日本-日本の出品当事者の意図と欧米側の反応」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』（2004年）、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』（思文閣出版2017年）がある。拙稿では、博覧会事務局当事者の意図を人物像と万博での活動、工芸品の出品から検討し、欧米側の反応と対比させることでその実態を明らかにし、事務局の意図には松方と前田にみる二つの意図があったが、前田の意図が日本政府の意図に色濃く表れていたことを指摘した。寺本氏も同様の手法で検討し、意図については、前田の万博をめぐる活動を以て日本政府の意図とし、「外交」を目的とした1867年パリ万博との比較において当万博の特徴は「産業芸術」の振興にあったと結論付けている。
- (2) 拙稿「博物館設立期における万国博覧会出版物とその意図に関する一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第27号-2』（2020年）及び拙稿「博物館設立期における万国博覧会に関する日本政府の人員体制をめぐる一考察-1876年フィラデルフィア万博と1878年パリ万博を中心に」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第28号-2』（2021年）にて明らかにした。
- (3) 北海道新聞社『北海道大百科事典 上』1876年 p453
- (4) 岩壁義光『明治11年巴里万国博覧会と日本の参同』「神奈川県立博物館研究報告 人文科学」第12号（1985年）pp92-124
- (5) 「仏国博覧会事務局内務省中ニ被置ニ付各庁へ御達伺」（明治10年3月22日）『公文録』公02010100 国立公文書館蔵
- (6) 「内務省中仏国博覧会事務局ヲ置ク（明治10年3月22日）」『大政類典』太00395100 国立公文書館蔵、「仏国博覧会事務局ヲ上野公園内へ設置届」（明治10年4月13日）『公文録』公02038100 国立公文書館蔵、「内国勸業博覧会事務局及仏国博覧会事務局ヲ内務省へ移転」（明治11年1月31日）『大政類典』太00645100 国立公文書館蔵
- (7) 岩壁義光 前掲論文 p95
- (8) 佛國博覧会事務局『佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第二篇日本部』（1880年）p1-5及び 岩壁義光 前掲論文 p101。
その他、博覧会事務局とは別に、文部省から九鬼隆一、手島精一等、海軍省からは遠武秀行が派遣されている。また、「在仏の7名」には、松方正義が現地で

発行した地租改正に関する仏語の冊子の訳者が「山田寅吉・博覧会事務局員」となっていることから山田も含まれていたと思われる。なお、山田は、万博後に帰国し、松方が万博の際に購入した製糖機を導入して設けられた紋別の官営製糖工場の所長を務めた人物である。

- (9) 博覧会倶楽部編『海外博覧会本邦参同史料』第2輯 巴里万国博覧会（審美書院1928年）,前掲『佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第二篇日本部』
 - (10) 前掲『佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第二篇日本部』p20
 - (11) 「仏国博覧会副総裁松方正義帰朝ニ付拝謁ノ件」（明治12年3月3日）『公文録』公02471100 国立公文書館蔵
 - (12) 「仏国博覧会総裁以下廃止ノ件」（明治12年3月26日）『公文録』公02471100 国立公文書館蔵,「仏国博覧会事務局閉局ノ件」（明治12年3月31日）『公文録』公02471100 国立公文書館蔵
 - (13) 「内国勸業博覧会事務局及仏国博覧会事務局ヲ内務省へ移転」（明治11年1月31日）『太政類典』太00645100 国立公文書館蔵,「内国勸業博覧会事務局并仏国博覧会事務局省中へ移転届」（明治11年1月31日）『公文録』公02259100 国立公文書館蔵
 - (14) 前掲『佛蘭西巴里府萬國大博覧會報告書 第二篇日本部』p20
 - (15) 編集、1919年～1921年11月にかけて作成。（『松方正義関係文書 第一巻』（1879年 東洋研究所）所収）
 - (16) 『社会及国家』第252号（1937年）所収
 - (17) 祖田修『前田正名』（1973年 吉川弘文館）参照。
 - (18) 三浦泰之「ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道」『北海道開拓記念館研究紀要 第29号』（2001年 北海道開拓記念館）p199
 - (19) 三浦泰之 前掲論文 p199
 - (20) 『米国博覧会報告書』第2巻（1876年 米国博覧会事務局）国立国会図書館蔵 特28-157 参照。
 - (21) 加藤克「札幌博物館旧蔵万国博覧会関連資料について」『北大植物園研究紀要 16』（2016年）pp27-28
 - (22) 『明治11年佛国博覧会出品目録』（1880年 佛国博覧会事務局）復刻フジミ書房 2001年 参照。
 - (23) 「明治十一年佛国大博覧会本館日本部陳列場之図」（『佛蘭西農商務省決定額金決算表』復刻フジミ書房2001年 所収）参照。
 - (24) 『官員録 明治8年11月改正』国会図書館蔵14. 1-3
 - (25) 戸田博史「開拓使別海缶詰所」『北海道大学文書館年報（3）』2008年P44、pp78 - 79
 - (26) 山中史郎『日本缶詰史 第1巻』（日本缶詰協会 1962年）P59
 - (27) 山中史郎 前掲書 pp68 - pp69
 - (28) 戸田博史 前掲論文（3）p54
 - (29) 『開拓使事業報告 附録布令類聚上』（大蔵省 1885年）p625 国立国会図書館蔵27-102
- 勸業課および博物課は、いずれも東京仮博物場及び札幌仮博物場を管轄してい

る部署であり、出品物の収集と博物館の収集業務が相互に関連する形で行われていたことを表している。この点については稿を改めたい。

- (30) 『仏国博覧会出品目録』 簿書2986 北海道立文書館蔵
- (31) 『開拓使事業報告書 第三編』 国会図書館蔵 27-102
- (32) 『東京・札幌文移録丙一ノ三 明治十一年』 簿書2405 北海道立文書館蔵
- (33) 『東京諸課文移録 明治十一年』 簿書2641 北海道立文書館蔵
- (34) 『開拓使第四期報告書』 (1878 - 9年) 国立公文書館蔵 記01721100
- (35) 『開拓使事業報告書 第三編』 国会図書館蔵 27-102
- (36) 『仏国博覧会書 十一年一月』 簿書2986 北海道立文書館蔵
- (37) 山中史郎 前掲書 p53参照。
- (38) 『仏国博覧会書 十一年一月』 簿書2986 北海道立文書館蔵
- (39) 山中史郎 前掲書 pp53 - pp54参照。
- (40) 『鑑詰類集 明治十三年自一月至九月』 簿書4472 北海道立文書館蔵
- (41) さらに、鮭缶詰ではないが、「牡蠣、鹿肉、しま干鰯」の缶詰については、万博へ出品して仏国・英国で賞賛されたとして、開拓使製造物産売捌大取次人を介して一般に販売する旨の広告が『函館新聞』(明治11年7月22日)に掲載された。つまり、万博を機に国内需要の開拓も目指したことがわかる。

1940年ドイツ軍「電撃戦」とパリ陥落はどう報じられたか

一日米ジャーナリスト報道の比較考察試論—

池村俊郎

第2次大戦下の1940年5月、西方進撃を敢行したナチ・ドイツ軍は、破竹の侵攻速度でわずか35日でパリ入城を果たした。その直後、フランスを大混乱の中で降伏せしめた。戦車中心の機械化部隊と航空戦力を合わせた独軍の軍事戦術は「電撃作戦」(ブリッツクリーク)⁽¹⁾と呼ばれ、世界を瞠目させることになる。ドイツ軍の無敵ぶりは、第1次大戦戦勝国であった陸軍大国フランスの弱体を際立たせるとともに、遠くアジアで対中戦争を続ける日本をも驚愕させ、日本政府と軍部の戦争指導を引き返せない対米戦争の序章へと導くのである。

前大戦の初頭に起きた大国フランスの降伏は、欧州戦争に不介入方針をとっていたルーズヴェルト米政権と、もう一つの軍事大国日本がそれぞれ持っていた大局展望に大きな影響を与えずにはおかなかった。とりわけ日本では一部に異論のあった日独伊防共協定⁽²⁾の枢軸路線に対し、朝野をあげてドイツ礼讃の声が高まることになり、日本軍部を一段と大胆な行動へ向かわせる一因となった。その際、欧州戦線をめぐる報道が国民に与えた衝撃は当然大きかった。とくに当時の新聞報道が持った国民への影響力は、報道管制下の「官製報道」の権威づけと、情報源の希少さによって現代のテレビと新聞が併せ持つ以上の力を有していたかもしれない。

この論考では、日本の運命にも関わったパリ陥落とフランス降伏という事実が日米のジャーナリストによってどう報じられたか、その視点の違いがどこにあったか、といった検証を第一義とする。その上で戦局の進展がそれぞれの本国である日本とアメリカの針路を左右したのは間違いがないが、彼らの報道がそこに何を加えたか、推察したい。日米2人の記者が示した視点の違いは、自ずとジャーナリズムとは何かという問いかけを浮かび上がらせるで

あろう。もちろん、あの時代の特派員報道は任地国ドイツばかりか日本でも軍部の検閲下にあり、事実を報じるには制約が大きかった。当然、報道の立ち位置は本国がドイツと友邦国であるかどうかにも左右される。それを差し引いても、日米の記者の違いは歴然としてあったといえる。

その考察を進める上で以下の主に三項目を検討したい。1) ナチ・ドイツ軍の「電撃戦」がどのように敢行され、仏英連合軍を潰走させたのか。2) 独軍の「電撃戦」からパリ陥落に至るまで日米の特派員がそのプロセスをどう報じていたのか。3) 報道の差異の背景とフランス敗北が日本のそれから与えた影響をどう考えるか。

日米の報道を比較するうえで、ここでは主に2人のベルリン駐在特派員をとりあげる。米CBSラジオ放送のウィリアム・シャイラー⁽³⁾と朝日新聞の守山義夫⁽⁴⁾である。なぜこの2人かといえば、日本人記者で陥落直後のパリに直接入ったのは守山だけであったこと。一方シャイラーは、1930年代半ばから米通信社やCBSベルリン特派員としてナチ第3帝国を見続けた豊富な蓄積に加え、パリ陥落後、ヒトラー総統が主宰したフランス降伏調印式を現場で目撃し、世界的なスクープとなるラジオ実況中継放送を行った記者であったことによる。何よりも、1925年からパリを拠点に米シカゴ・トリビューン紙の欧州特派員を務め、フランス第三共和国の盛衰にも深く通じていた。パリ陥落とフランス敗戦を目撃するジャーナリストとして彼ほど格好の人材はいなかったであろう。

40年5月から6月にかけて展開した独仏の戦闘過程に関しては、膨大な書籍文献が出版されている。フランスの敗北は必然だったか否か⁽⁵⁾が、なお今後に残される歴史的論点であり続けるだろうが、ほぼ史実として確定したものが多く。そこで今回の主な参考文献が公表された出版物であることに加え、パリ陥落に至るまでの戦闘経緯や政治的動向など、史実として定まったものを一つ一つ文献として引用する煩瑣を避けるため、主たる文献を事前に列記しておくこととした。

シャイラー記者によるベルリンとパリからのCBSラジオ放送原稿をまとめた『This is Berlin 1938-40』^[註記1](W.Shirer, 1999, Hutchinson)と、同時期に書き綴った『ベルリン日記1934-1940』^[註記2](シャイラー、大久保・大島訳、筑摩書房1977)。この日記は最初の放送原稿を補完すると同時に、検閲下で表にできなかった記者の心情や実際に目撃したベルリンの実情、軍事的分析が詳述されており、いまなお貴重な証言録となっている。日本人の

守山の記事等を朝日新聞縮刷版（昭和15年1-6月）より引用した。

独軍電撃戦に関しては『西方電撃戦 フランス侵攻1940』（JP・パリュ、宮永・三貴訳、大日本絵画2013）と、『戦車将軍グデーリアン 電撃戦を演出した男』（大木毅、2020 角川新書）。『西方電撃戦』の原本出版は1993年で、戦争当時の写真を現代の同じ風景と比較しつつ図をふんだんに使い、一日ごとの各戦線の動きと戦況を詳細に叙述した大著である。日本のドイツ学徒が著した『戦車将軍グデーリアン』は電撃戦の現場演出者といえた独軍指揮官の足跡を追い、客観的な評価を下している。電撃戦という言葉が持った魔力を指揮官の人間性分析から解きほぐす意欲的な著書である。

フランス指導部の動向については『L'Effondrement 1940』（Henri de Wailly、Perrin 2000）、また英政府の危機対応は『The Duel /Hitler vs. Churchill 10 May-31 July』（J.Lukacs、Phoenix 2000）を参照した。補足的に他の書籍、研究誌を適宜参看した。

I. 「電撃戦」という神話

1939年9月ドイツ軍のポーランド侵攻で開始された第2次大戦は、北欧への舞台を移して拡大した。ソ連のフィンランド侵攻に加えて、ドイツが鉄鉱石の重要資源を頼るスウェーデンおよびその搬出港のあるノルウェーをめぐり、独軍と英仏連合軍の戦いへと続いた。ナチ・ドイツはノルウェーやデンマークの中立宣言を無視した上で現地へ進撃し、英仏の派遣軍を敗走させる。次に独軍がいつ西方進撃、すなわちフランス侵攻に踏み切るか、が焦点となったのは当然である。だが、フランスはといえば、独仏国境で散発的な撃ち合いがある程度で、国民は恐れつつも、「奇妙な戦争」と呼ばれた“戦時下の平和”にまどろんでいたのは知られた通りである。

40年5月10日払暁、独軍は「黄号」作戦を発動してオランダ、ベルギーへ奇襲攻撃をかけて英仏連合軍の主力をダンケルクから海上へ脱出、敗走させたうえ、一気にパリまで進撃した。作戦発動からわずか35日でパリが陥落。のちに「6週間戦争」と呼ばれる電撃戦の神話がここに生まれた。

電撃戦とは何か。定義でいえば、「戦車を中枢に据えて、機械化歩兵、自走化砲兵、その他の支援部隊で構成される機動部隊《装甲部隊》が高速で行う突進と、空軍（特に急降下爆撃機）による対地支援を組み合わせた作戦構想」⁽⁶⁾となる。つまり、戦車が主力となって脆弱な敵陣防衛線を一点突破して相手軍を狼狽させ、大混乱を起こさせる。急降下爆撃機シュトゥーカは、

サイレンを鳴らして空から急降下して兵士たちを恐怖に陥れ、敵戦車、砲部隊を強襲。空軍の効果的な支援を得て突撃する高速機械化部隊が、さらに敵陣の防衛線を收拾不能な混乱に追い込むものである。

4年をかけた第1次大戦で持久戦の末、敗れたドイツが世界に先駆けて採用した作戦構想とされる。英仏両国でも大なり小なり機械化部隊の創設と戦略を企図しなかったわけではない。何よりも電撃戦の元となる戦術論に大きな影響を与えたのは、イギリスの軍事理論家バジル・リデル＝ハートの機械化論とJFC・フラーの機動戦理論であった⁽⁷⁾。ポーランド、フランス、ソ連の各戦線で機甲部隊を縦横に指揮して、戦場で電撃戦を演出したといわれたハインツ・グデーリアン独軍司令官でさえ、リデル＝ハートの著作に着目し、指揮運用に応用したと戦後の自著で述べている⁽⁸⁾。

この電撃戦が成功するには、しかし、戦車部隊の効率高い運用を支える通信能力、制空権の成否、装甲部隊兵士の練度、燃料輸送の確保、戦場の地理的条件、敵軍の防衛作戦能力の強弱など、あらゆる要素が自軍に有利でなければならなかった。そうでなければ、戦力が拮抗した大国間の戦争で神話化するほどの完勝がありえるわけがない。それが軍事力に格段の差があった緒戦のポーランド戦でもなく、ドイツ敗北へ道を開くその後のソ連戦でもなく、僥倖のように対フランス戦で現実となったといわなければならない。

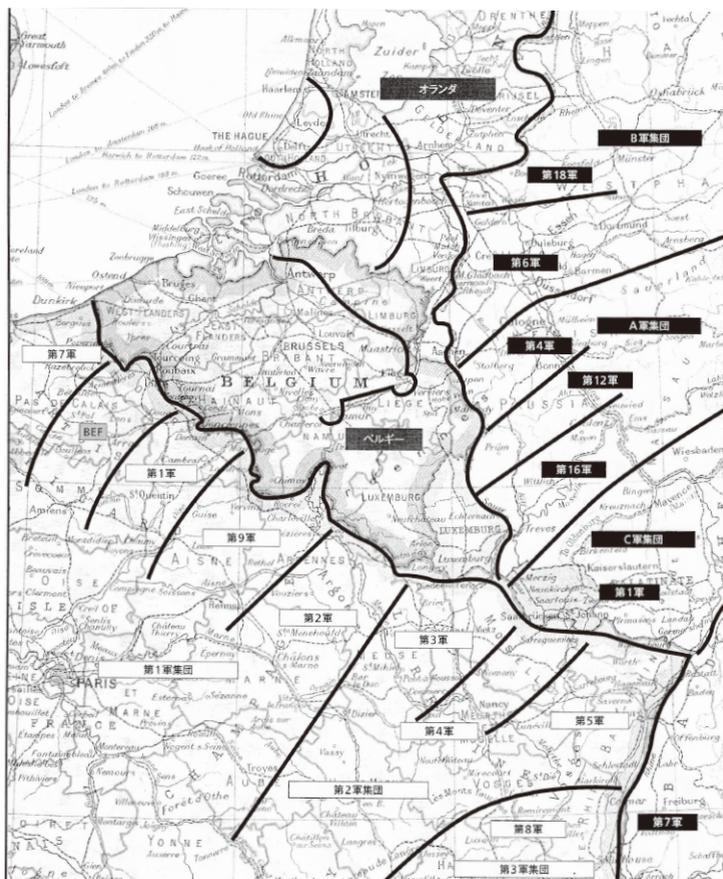
大国フランスの降伏は、独軍には常に電撃戦を展開する能力があるという大いなる幻想の源となった。その誤解は、とりわけ日本の軍部をドイツ不敗神話となって魅了し、国の行方を過つ原因となっていく。何よりも、電撃戦成功に自信過剰となったドイツ自体がその後、戦略的条件が全く異なるソ連侵攻作戦を敢行し、壊滅的な敗北へと引きずり込まれる原因となった。

電撃戦のネーミングがいつから生まれたのか。ドイツ軍は1920年代より前大戦の敗北から立ち直るため、戦車を主体とする機械化部隊の研究、訓練を続けた。その編成や実地訓練を通じ、装甲部隊の育成にあたった一人、グデーリアン装甲兵大将が戦後著した回顧録『一軍人の回想』（原著1951年発刊、邦訳題『電撃戦』）が英訳版でも出版され、それがグデーリアンの名声を生み、いわゆる電撃戦理解の基本資料となったとされる⁽⁹⁾。しかし、ドイツ軍の軍事理論に「電撃戦」の概念はなく、国防軍の文書でも使われていなかった。むしろ戦車部隊の劇的進撃ぶりを形容するため、ドイツのプロパガンダもしくはジャーナリズムが生み出した用語であったのではないかという⁽¹⁰⁾。

Ⅱ 「黄号」作戦発動からパリ陥落へ

西方戦線の展開はほとんど史実となっている。ここでは戦況の検証が目的ではないので、推移を簡潔に触れる。定石のようにいわれるのが、独装甲部隊の奇襲作戦である。仏英連合軍の主力は、機械化部隊に対し天然の防壁とみなされたベルギー南部からルクセンブルクに広がるアルデヌス森林地帯をドイツ装甲部隊に奇襲された上、これも地形上の防衛線としたムーズ川の渡河を許してフランス北東部からベルギー方面で孤立させられた。

独軍と仏英連合軍の配備図⁽¹¹⁾【写真1・両軍展開図】にある通り、独軍は



(写真1・両軍展開図)

北からB軍集団、A軍集団、C軍集団をそれぞれの目的をもって配置し、迎え撃つ仏英軍は北方の仏ベルギー国境に布陣した最強の第1軍集団を経て、第2軍集団、さらに南部の第3軍集団を配備した。軍集団はいくつかの軍団で編成され、軍団は複数の師団で構成される。

ドイツ軍は前年9月より50師団増強し、134師団を西部戦線に投入した。そのうち10師団が装甲部隊。一方の仏軍は102師団で7師団が機甲化部隊で、北方の連合軍第1軍集団に編成されたイギリスの欧州派遣軍（BEF）は10師団編成で、ほとんどが車両化部隊であった⁽¹²⁾。両軍の保有戦車数だけを比べれば、独2439台、仏軍だけで3254台で独軍が劣勢。しかし、各戦車同士の高い通信機能と、急降下爆撃機を主体とする航空戦力の違いが大きな決め手となったといわれる⁽¹³⁾。

第1次大戦でドイツ軍はベルギー方面からパリへの侵攻を図ったものの、仏英連合軍の防衛線を打破できず、消耗戦に持ち込まれて敗れた。ナチ・ドイツも当然、「シュリーフェン計画」といわれた前大戦当時の戦略を踏襲すると思われたし、ヒトラーと軍指導部も当初はその方針でいた。しかし、前大戦と違い、戦車と航空機という新兵器があった。そこで独A軍集団参謀長エーリヒ・フォン・マンシュタイン中将が、一番北に展開した独B軍集団をおとりとして最強の連合軍主力をベルギー方面へ深くおびき出し、その間に自軍A軍集団の装甲部隊がアルデンヌ森林地帯から進撃して敵主力の背後を襲うという新プランを編み出した。ベルギー方面へ主力を注ぐ従来の案も4回の改定を経るほど軍内部の意見は割れていたし、新案はさらに対立を深くした。土壇場で、従来の作戦を根底から覆すマンシュタイン計画をヒトラーが決断して採用し、「黄号」作戦として発動した⁽¹⁴⁾。

結果的にベルギー領内へ深くおびき出された仏英連合軍の最強軍団は、アルデンヌから大西洋岸へ進撃した独A軍集団に背後を突かれ、ダンケルクへ敗走撤収に追い込まれた。ヒトラーの決断と新作戦の圧倒的な成功が以後、軍総指揮に関し、独裁者の権威にだれも盾突けない不幸のタネをまくことになった。英政府があらゆる艦船、大小船舶をダンケルクへ駆り出して「ダイナモ（発電機）救出作戦」を敢行したのがこの時である。ヒトラーの謎の進撃一時停止令が出る中で、5月27日から6月4日までに英本土に帰還できたのは英軍19万8315、仏軍中心の連合軍兵士13万9911の総計33万8226人に上った⁽¹⁵⁾。

前大戦の膠着戦を想定していた仏英軍司令部がドイツ装甲部隊の侵攻速度

に動転したとしても、当然ながら独軍すべてが高速で移動できたわけではなかった。多くの砲や装備、兵士が馬車や人力で前線へ向かっていた。勇敢な戦いを挑んだ連合軍部隊もあったが、主要道路に溢れた避難民の群れに進撃や退却の進路を阻まれたりして、組織的な抵抗を維持できなかった。

国土が激戦地となったベルギーの降伏と英仏軍主力のダンケルク撤収がほぼ同時期に起き、実質的な勝敗は決した。ドイツ装甲部隊によって分断された連合軍には、パリを守る第2防衛ラインを構築する予備兵力がもはや残されていなかったからである。

Ⅲ パリ陥落に至る日米報道の一端

軍事作戦の進行は成功すれば、その国にとって格好の士気発揚と宣伝の機会となるので、軍同行取材団として国内外記者を招致する。この戦線でもドイツ軍・外務省がベルリン駐在外国人特派員を取材に招き入れた。もちろん、当局側が友好的と認めた者、本国で影響力あるとみなすメディアの記者を招くのが通例である。守山と朝日新聞の場合、そのいずれをも満足させたのであろう。

守山とシャイラーの2人は、西方侵攻作戦がドイツ側に有利に推移し始めた5月19日から24日まで同じ取材団に組み入れられ、最初の取材行に向かった。記者団は米4、イタリア3、スペイン1、日本1の計9人⁽¹⁶⁾。放送原稿を厳しくチェックされるシャイラーと、友邦国の守山ら日本人特派員とは検閲のレベルが違った。シャイラーの長女インガ・シャイラー・ディーンの証言によれば、ラジオ放送の影響力を熟知していたナチ政権は、外国人特派員のラジオ放送原稿を宣伝、外務両省と最高司令部の3機関で検閲した。対して、新聞記事に関しては「追放」の脅しを常時突きつけるものの、基本的には検閲を強制しなかったという⁽¹⁷⁾。とはいえ、東京で新聞社は新聞紙法によって検閲対象となっており、言論統制が行き届いていたのはいうまでもない。新聞編集側がある種の「協力体制」を受け入れていたのも否定できなかっただろう。

シャイラーは取材団としてベルリンからブリュッセルまで行った。急降下爆撃機と戦車、後方の砲撃部隊による電撃戦の現実を見た。「(急降下)爆撃機の攻撃は大砲よりも正確」「連合軍はドイツ軍の輸送手段や道路を全く攻撃していない」「ドイツ軍の補給部隊が延々と続くのに連合軍の空軍機を一機も目撃できなかった」など途中のケルンから報じた。独軍の移動の速さに

驚くとともに、英仏軍の抵抗がどこで展開しているのか、激戦の痕跡を目に
しなかったために苛立ちを隠せずにはいた。とりわけ、上空を飛ぶ連合軍の空
軍機をほとんど目撃しなかったことに衝撃を受け、失望していた。

独軍戦車や車両部隊は多くの場合、ベルギーやフランスの通常道路を一定
の速度で進撃してきた。連合軍の退却の際、道路や橋梁破壊をしないまま後
方へ逃れたことにシャイラーが驚愕したのは当然である。資料『西方電撃戦』
(p264)は、フランスで当時から一般に販売されていたミシュラン社のドラ
イブ道路地図を独軍戦車部隊が参照したと指摘する。そこには指揮車の傍ら
に降り立ち、地図を両手に広げる第25戦車連隊長の写真が掲載されている。
多くの幹線道路が破壊されなかったので作戦に活用でき、市販のドライブ用
フランス国内地図を使える。こうした幸運が車両部隊の進撃速度を支えた一
要因となっただろう。逆にいえば、そうした僥倖は二度と起きるものではな
かった。その後のロシア戦線では遭遇する渺渺たる草原と泥濘の地に悪戦苦
闘することになる。

戦争による破壊を見た中で、シャイラーには中世時代に創建された大学都
市ルーヴェンの壊滅状態が胸をついた。「その大学図書館はアメリカの寄付
で建設されたもの。建物は徹底して破壊され、無数の書物が焼け焦げていた」
と報告した⁽¹⁸⁾。案内した独軍将校はその破壊が英軍によるものと説明したが、
独軍の空爆や砲撃による破壊だろうと推察した。

一方、若い守山は戦場へ近づく緊張と、ドイツの誇るアウトバーンを時速
140^{キロ}で飛ばして行く取材車両の高速移動を興奮して伝えるとともに、「北ド
イツの平原には戦争の影はみじんも見られず、大戦争の勃発にも少しもあわ
てたところがない」「一切の準備は百^{パーセント}完了した心憎いまでに落ち着き払っ
た銃後の姿なのだ」とつづる。戦時工業の心臓部とされたルール地方では「巨
大な煙突の林の中を突き進んだ。どの煙突からも景気のよい煙が立ち上って
太陽をさえぎるばかりの全能力をあげての生産ぶり」と描写した。記事の見
出しも、「戦勝景気の後方基地、ルール地方損傷なし、ベルギー戦線従軍第
一報」と、視点の置き方でシャイラーとは最初から色合いが異なる。

シャイラーはこの軍同行取材で5月20日の日記に「私の生涯のなかで記憶
すべき一日だった」⁽¹⁹⁾と、この戦争の殺戮兵器が持つ破壊の激しさを書き
残した。とくに先に触れたベルギーの平穏な大学都市ルーヴェンの破壊ぶり
が衝撃であったと理解できる。これに対し、同じ取材団にいて同じものを見
たはずの守山の筆致には、撃墜された英爆撃機1機の残骸をベルギー住民が

見守る現場を除き、市街地の破壊について言及が一切ない。

検閲官と闘う上でシャイラーは様々な工夫を凝らしたとある。公式発表や現地新聞報道を情報源とし、自分の取材情報や評価を極力抑えているが、物資不足、家庭の庭の鉄柵や教会の鐘の抛命などは抛出命令を引用して詳しく伝えた。西方侵攻作戦前、配給券で自分が9か月間に買えるものを「ソックス2足、ハンカチ2枚、ワイシャツ1枚、ネクタイ2本」などと紹介している⁽²⁰⁾。すでに緒戦段階でドイツは国民に日用品不足に耐えるよう強いていた。実情が自ずとわかるよう報じる彼のアイデアの一つである。そして古鉄から自家用車バッテリーに至るまで抛出命令を次々と出す物資不足のナチ政権について、「1938年に外国からはほぼ銅100万ト、鉛20万ト、錫1万8千ト、スズ4千トを輸入している」⁽²¹⁾ドイツがどう長期戦を戦えるというのか、と根本的な疑念を提示する。

戦況は一段と独軍に有利に展開し、先遣部隊がパリを目前とする中で再び、軍と外務省がベルリン駐在の外国人特派員を招致して取材団を組んだ。日本人記者からまたも守山が選ばれ、そこに加わった。招致記者12人のほとんどがドイツ友邦国の出身者で構成された。アーヘン発で送稿された守山の記事は「日本はどう出るんだ “勝戦さ見物”の記者団 火華散る食卓の放談」の見出しで、扱いこそ地味ながら、パリ到達の大行事を前に新聞界でいう勇ましい「前景気記事」となっている。

「第一にドイツ軍が調子よくやっているところへもってきてイタリアが横合いから応援に飛び出してきたので⁽²²⁾勝ち戦を見物に出かけるといった感じ」「スペインの某君は・・・(我が国も) 将来ドイツ側に立って戦争に参加することもあろうじゃないか」「これから戦争の呼吸を計るんだよ、ハハハハ、と笑い飛ばす」「残っているのは日本だけだ。この日本がどうでいるかということは世界の新しい注目の焦点だ」⁽²³⁾

パリ行き第一陣取材団の人選にもれたシャイラーはベルリンでドイツ軍の首都進軍を知る。その日教会の鐘が鳴り渡り、パリ陥落が喧伝された。市民が集まる湖に出てみると、500人ほどの行楽客がいた。法外な興奮はなく、わずか3人が新聞号外を買っただけであったという。1925年から青春時代を過ごしたパリ陥落のニュースに感慨を「哀れなパリ！ 私はパリを思って泣く。あれほど長い年月パリは私の故郷だった。私は人が女を愛するようにパリを愛したのだ」⁽²⁴⁾と日記に記した。

IV 陥落したパリ報道

守山らドイツ軍取材団は6月14日パリに入る。取材班に割り振られた宿舎ホテル・スクリーブから入城原稿を送稿し、その記事は「独軍パリ入城従軍記 余りにも淋しい落城 独兵に強者の美しさ」の大見出しで東京発刊の17日朝刊の事実上の1面トップ【写真2・紙面コピー】で掲載された。

「我々を乗せた車は時速90^{キロ}の快速で人通りのないパリ市中へ飛び込んでいった。家々はほとんど表を閉ざし（中略）所々に薄汚い老婆や烏打帽子にネクタイなしという労働者が4、5人ずつ固まりあって独兵の入城を見守っている」「藍色の制服を着た警官が壁にもたれて茫然と腕を組んでいるのも、パリの淋しい落城風景だ」「人口370万の中半数以上200万はパリを脱出したといわれる」「黄昏の街路樹の下にたたずんでいる人影の大部分が赤い口紅をつけて、赤いハンドバッグを抱えた黒っぽい服装の女性であることに注意してみれば、ここにも国際都市パリの特殊な落城風景がうかがわれる」「有名なシャンゼリゼ大通りは独軍の灰色のトラックの駐車場と早変わりしているのも夢のようだ。エトワルの凱旋門の楼上には夕陽を浴びて赤い新しいナチスのハーケンクロイツ旗が翻っているのも確かに歴史的な事実には違いない」

長いポ記事は当時の日本人にも名前だけは知られたパリの各所をめぐりつつ、「見たもの」を書き綴っている。しかしながら、そこには「見たもの」

以外の情報はなく、背景にあるのは「悲哀の落城」という記者の気分であり、それこそが花の都パリ落城のニュースを受け取った日本の読者が期待したものであっただろう。そして、結びの近くで「わずかに35日目にパリに入ったドイツ軍の姿は確かに美しいものの一つに属する。それは強者の美しさ、あるいは力の美しさである」⁽²⁵⁾と現場に居合わせた興奮を総括している。

守山の経歴に照らせば、フランス政治社会に関する知識は期待すべくもない。フランス語で取材する力量



【写真2・紙面コピー】

はなかったはずだ。それゆえ、陥落記事の紙面上の派手な扱いに比べ、実質的な情報は極めて薄い。独軍パリ進軍という劇的な状況下に「行った、見た」の記事でしかない。だが、その筆致が日本の読者にパリ陥落を情緒的に強く訴えたのは間違いないであろう。

一方、3日遅れて17日にベルリンから到着するシャイラーは、新首相となった前大戦の仏軍英雄フィリップ・ペタン元帥が休戦を申し入れた重要ニュースを街頭のラジオ放送で市民と一緒に聞いた。コンコルド広場に集まった彼らがとまどう様を目撃した。中産階級が多く住む地区を歩き、アパートのコンシェルジュ数人に聞くと、「みんな逃げ出した」という。中産階級と富裕層がパニックを起し、真っ先に逃避した事実を確認した⁽²⁶⁾。

彼の鋭いプロ意識と欧州政治に精通した知識が生きるのは、3日後の6月21日、パリ北東郊外コンピエーニュの森でフランス降伏の調印式があるのを突き止めてからだ。ドイツ関係者を説得し、ラジオ実況放送を行えることになる。そこが前大戦時にドイツが降伏調印を強いられた場であるのに気づいていた。かつて調印が行われたフォッシュ元帥専用列車を使い、ナチ政権はそこでフランス代表団に降伏文書にサインさせようとしている。ヒトラー以下の政権高官がずらりと並ぶ式をつぶさに見た。ドイツ側の技術的ミスで放送は検閲をうけず、しかも録音版でもなく、ベルリン経由の短波でニューヨークへ生中継される世界的スクープとなる。

「私が立つ場から少し離れた地点に古い列車車両があります。1918年11月18日、前大戦の停戦協定が調印された列車です。今回、そこで進行中の戦闘に終止符を打つのです。歴史をひっくり返すような出来事です」⁽²⁷⁾

実況マイクを握るシャイラーと目撃の間にヒトラー以下のナチ政権最高首脳たちが現れ、前大戦の連合軍の戦勝記念碑をゆっくりと見て歩いた。ヒトラーの顔と目には憎しみの炎が燃えているように見えたと後に記述する⁽²⁸⁾。

ドイツ軍が同行してきた他の記者団の多くは翌日、ベルリンでヒトラーの重要発表（フランス降伏の公式発表）があるとして帰任させられていた。アメリカへのラジオ実況中継を実現したのはシャイラーの他に、米NBC放送の現地契約記者がいたが、シャイラーの頭上に大スクープの勲章が輝くことになる。

パリには本来、日本人特派員として朝日、東日（毎日）、読売、同盟通信の常駐記者がいたはずである。しかし、ドイツ軍侵攻とともにパリから退避する仏政府と各国大使館に同行して記者たちもツールやボルドーへと移動し

た。そのため、パリで現場を目撃できた日本人記者はベルリンから来た守山しかいなかった。事実、守山の「パリ落城記」が掲載された同日の他紙朝刊には「ツールより 混乱のパリ脱出記（榎本特派員）」（東日）というパリから南方郊外へ避難した特派員記事や、「契約海外通信社によるヒトラー会見」（読売）が1面に掲載された。パリ発の特派員電はなく、各社記者が首都から退避していたとわかる。

守山はパリに居残り、24日付朝刊社会面にも「あはれ地に堕ちた三色旗情けないパリの女 敗戦の日になお口紅」の見出しで、街中の空気を伝える記事を送稿している。具体的な情報はなく、「記者が見たこと、思えたこと」だけで書いているのに変わりはない。「フランス革命以来彼らが自己の生命以上に愛した言葉、『自由と平等』はもはや近い将来に再び彼らの上には戻ってこないだろう」と断じたが⁽²⁹⁾、ほんの数年を経ずに歴史が若い記者の立言を裏切る結果になったのは論をまたない。

V 日米報道の差異と考察

ヒトラーのナチス政権登場とともに欧州は動乱時代に突入した。それはまた、アメリカで新聞に加えてラジオが新しい報道媒体として台頭する時期と重なった。家庭の娯楽媒体から、新聞よりも同時性を高めてかなたの出来事を報じる報道媒体へと発展する、ラジオ革命というべきメディア新時代の幕開けが、第2次大戦開戦から欧州を覆った緊迫の日々に起きたといわれる。

シャイラーは政治的な自由主義者であり、事実を報じること、可能な限り報道の自由を守るというアメリカ・ジャーナリズムの原点に立つ典型的な記者といえる。彼の残した放送原稿や、それ以上に、ベルリン時代の日記はほぼ80年が経過したいまでも、あたかも同時代人の書き残したもののように読める。現代の我々と変わらない価値観で物事を見つめ、情勢を判断していたからであろう。

これに対し、守山は旧制大阪外国語学校卒業後、入社した朝日新聞大阪社会部で「名文」を書ける若手記者として囑望されていたようだ。1939年3月、28歳の若さでベルリン特派員に任ぜられたとき、「編集局長になるよりうれしい」と語ったという⁽³⁰⁾。学窓でのドイツ語専攻を除けば、欧州における生活体験がなく、国際政治の知識も薄い中で、巨大な動乱が始まろうとする地に派遣された。その任務は、短い取材経験ではとてもおぼつかない重さだったろう。着任直後に戦端が開かれ、ポーランド侵攻があり、独軍の西方

侵攻作戦が開始された。辞令を受けてわずか半年後には、欧州大戦の渦中に放り込まれたことになる。

日本の新聞で評価された名文記者とは、文章力があることとほぼ同義語なのだが、そこには陥穽が潜む。事実を克明に伝えるよりも、読者に「読ませる」ことに力点が置かれ、現実とは微妙に異なる小さな世界が提示されることがありえるからだ。彼のパリ入城記は「見たこと」をまとめてあり、見た事実にほぼ間違いはないにしても、記事のほとんどが筆者の「思えたこと」で書かれている。文章や文体が逆に現実に色彩を与え、決定づけてしまう例といってよい。より大切な大局観については、すでに「ドイツ軍の勝ち戦」で決定づけられている。この問題は決して守山個人や当時の朝日新聞だけのものではない。他紙の記者が同じ立場にいたとしても、大なり小なり同様の記事を送稿していただろう。記者も日本という祖国から逃れられるものではなかった、という釈明をだれが否定できようか。

ナチズム礼讃でいえば、同じ朝日新聞には1930年代初頭から半ばまでのベルリン特派員で、ヒトラーと2度の会見記事をものにした黒田礼二がいた。その後退社して日独提携を訴え続け、日独伊3国同盟成立の喜びに涙した人物という⁽³¹⁾。これは推察になるが、独軍パリ入城同行記者団にベルリンの日本人特派員から朝日の守山だけが選ばれたのも、そんな先輩たちのドイツ当局に対する“功績”があったからかもしれない。ただし、そういう人物に比べ、守山が突出した親ナチであったという伝えない。

米CBSラジオは、1937年にロンドンへ派遣された欧州総局長エド・マロー⁽³²⁾を中心に経験のある新聞記者をスカウトしてラジオ・ニュースに起用し、報道の在り方を一新させた。米ラジオ発展史の通説では、ナチ政権による1938年3月オーストリア併合がラジオ報道の転換点という⁽³³⁾。以後、動乱の欧州情勢を各国首都の駐在記者たちが報告するCBS放送「欧州総合ニュース」は、ラジオを娯楽に加えて、ニュース報道の重要な発信源とする上で画期的な番組となる。「マロー・ボーイズ（マロー記者団）」と呼ばれる、こうしたラジオ報道記者の1人となるのがシャイラーである。彼らは頑なに中立主義に固執したルーズヴェルト政権に警鐘を鳴らすかのように、ナチ政権に潜む暴虐粗暴な本質を伝え続けた。パリ陥落とフランス降伏を経て、ヒトラー政権の次の標的としてイギリスが焦点となってくると、米世論もやっと現実に目を覚まし始めた。シャイラーは、「ヨーロッパの焦眉の問題は共産主義でもファシズムでもなく、ドイツ的なものの考え方が問題なのだ。これが解決されな

い限り、ヨーロッパには平和はない」⁽³⁴⁾と思うに至っている。

守山の「パリ落城記」が掲載された同じ紙面には、「重慶 最後の輸血路 仏印の敵性を一掃」という見出しで、日本軍部が仏領インドシナへ手を伸ばそうとする記事が掲載されている。その3日後、夕刊1面トップ扱いで「仏印への重大関心 帝国、独伊へ正式申し入れ」⁽³⁵⁾の記事が登場する。日中戦争の行き詰まりを打開したい軍部が、フランス降伏を奇禍として対中援蔣ルート閉鎖のため、現地進駐を企図した証拠がそこにある。その動きは独空軍による大規模なロンドン空爆とともに、米政府が日独枢軸の侵略性の深刻さに覚醒する重大な意味をもった。パリ陥落を契機に日本軍がいよいよ南進へ本腰を入れる構えとなり、フィリピン、シンガポールといったアメリカの権益要地が直接脅かされる事態が明白になっていく。40年6月の戦役は日本の運命に深く関わるものといえた。

時代の流れが奔流となって欧州からアジアまで戦乱へとなだれ込んでいた時期、1つの報道機関や記事がその流れを決定づけたはずがない。守山はドイツ敗戦までベルリンにとどまった。その間、言論界の重鎮で大日本報国言論会会長の徳富蘇峰の名を冠した「第1回徳富蘇峰新聞賞」を1944年1月、本人不在のまま受賞した。受賞理由に「戦フ独逸ノ国情ヲ明ラカニシテ我が国民ノ戦意高揚ニ多大ノ貢献ヲナシタリ」とある⁽³⁶⁾。

1920年代からパリで学び、1931年に読売新聞パリ支局長に採用された松尾邦之助がいた。パリ駐在日本人記者の中では、シャイラーに比肩できるといってよい西欧滞在の長期体験、フランス語力、知識を持つ人である。だが、独軍パリ進駐の日に現場に居合わせなかった。その松尾は、独軍電撃戦に敗れたフランス人の「だらしなさ」だけを見ていた自分が、その後のレジスタンスに現れた「彼らの『抵抗精神』の何物であるかを深く知らなかった」と、日本敗戦後になって吐露した。歴史上、個人の自由を守り抜くために激闘してきたフランス人の血の中には「現象面だけに捉われ、それに騙されている新聞記者などに解しえない『底』のようなものがあったのだ」⁽³⁷⁾と脱帽している。

そして松尾自身があの当時、読売新聞へ送稿した記事の多くが、「枢軸の守り固し」「新欧州、鉄の結合」「独逸の人間、戦力、食糧、完勝の鉄棒固む」といった派手なドイツ寄りの見出しと内容ばかりだったと正直に記した。敗戦後に帰国して静岡の義兄宅で自分のヨーロッパ報道記事スクラップを見せられ時、「わたし自身も日本を誤らせた罪を免れない一人だと思った・・・

もし弁解の理由があるとすれば、生殺与奪の権を握っていた読売本社の指令に服したということ、・・・その見出しをはじめ内容まで本社のデスクでかなり誇張され、でっち上げられ、軍国調に変貌していた」と告白することになる⁽³⁸⁾。その背後には自分が日本人であること、戦争開始に責任はなくとも、祖国の勝利を願った事実があったからだと述べている。そこにおいては本論で対象とした守山も、また当時の欧州で報道にあたった他社の日本人特派員たちも程度の差こそあれ、同じ懺悔と釈明を共有したのではないだろうか。

まだ日米戦争に至っていなかった1940年の欧州情勢の重要な局面で日本の特派員たちの新聞報道がどうであったか、検証がなお尽くされてきたわけではない。そしてシャイラーに代表されるアメリカの記者たちの報道との本質的な違いが何に由来するのか。それはとりもおさず、ジャーナリズムとは何かという問いかけを避けて通れないことを意味している。

【注記1】 放送原稿は1938年3月12日ロンドン発に始まり、1940年9月29日深夜、英軍による空爆下のベルリン発の最終放送までの分を収めている。秘密警察ゲシュタポによる支局捜索や支局スタッフの通報等、厳しい監視をくぐって放送原稿のほとんどを密かに持ち出せたと、1941年4月、アメリカで日記を出版した際に序文に記している。

【注記2】 『ベルリン日記』原本『Berlin Diary 1934-1940』は1941年アメリカで出版。監視摘発を逃れるうち原稿の一部が失われたとある。出版にあたり、記憶と残された放送原稿をもとに欠落部分を補足したとしている。日本ではその一部が1968年世界ノンフィクション全集第8巻に収められ、77年に改めて全訳が出版された。

(注)

- (1) 大木毅によればドイツ軍のドクトリンに「電撃戦」は存在しない。通説では第2次大戦緒戦、ドイツ軍がポーランドで展開したのを最初の電撃戦とする。フランス降伏に合わせて朝日新聞朝刊にドイツ軍勢力を紹介する3回連載記事が掲載され、タイトルを『独逸電撃作戦の準備』とした。すでに日本の新聞で「電撃戦」の用語が日常的に使用され始めていたことがわかる。
- (2) 1936年11月成立の日独防共協定に翌37年11月イタリアが参加。独軍の対仏勝利を経て40年9月3国同盟へ発展した。
- (3) William L. Shirer 1904-1993 パリを拠点に1925年からシカゴ・トリビューン紙特派員。29-32年ウィーン支局長。拠点をベルリンに移し、37-40年CBSラジオ特派員。戦後著述家として数多くの著書を出す。ナチ・ドイツとの戦争史を描いたノンフィクション『第3帝国の興亡』が世界的ベストセラーになる。
- (4) 守山義夫1910-64 旧制大阪外国語学校(現・大阪大学外国語学部)独逸語部卒。

- 朝日新聞入社後、社会部。沖縄や南京派遣取材などを経て39年ベルリン特派員。大戦勃発後も現地駐在。45年7月帰国。大阪本社社会部長など歴任して編集局次長、編集委員。
- (5) M.ヴィノック『フランス政治危機の100年』（大嶋訳 2018 吉田書店）p294
 - (6) 吉本隆昭『電撃戦の成立—軍事理論と政軍関係からの考察』（日大国際関係学部研究年報 第39集 平成30年2月）p28
 - (7) 同上 p30
 - (8) 大木毅『戦車將軍グデーリアン』（2020 角川新書）p24
 - (9) 同上 p22
 - (10) 同上 p171
 - (11) 別掲図 西方侵攻作戦時における独・仏英連合軍配置図。『西方電撃戦』p74より
 - (12) H.de Wailly『L'Effondrement 1940』（Perrin 2000）p120
 - (13) 前掲 大木 p202
 - (14) 『西方電撃戦』p52-55
 - (15) 同上p436-455
 - (16) 『ベルリン日記』p272
 - (17) 『This is Berlin』p7
 - (18) 同上p307
 - (19) 前掲『日記』p275
 - (20) 前掲『This is Berlin』p133-134
 - (21) 前掲『日記』p236
 - (22) イタリアが戦局を見て6月11日英仏に宣戦布告した。
 - (23) 朝日新聞朝刊6月14日付
 - (24) 前掲『日記』p316
 - (25) 朝日新聞朝刊6月17日付
 - (26) 前掲『This is Berlin』p327
 - (27) 同上p328-329
 - (28) 前掲『日記』p327-330
 - (29) 朝日新聞朝刊6月24日付
 - (30) 『新聞と戦争』（朝日新聞社 2008）p463
 - (31) 同上p456
 - (32) エド・マロー（1908-1965）CBSラジオからテレビ時代を生きた報道記者。ドイト空爆下ロンドンからアメリカへのラジオ放送で名声を博した。戦後はテレビでニュース報道、討論番組を編成司会し、テレビ報道ジャーナリズムを確立した人物と評される。
 - (33) 前掲『This is Berlin』p5
 - (34) 前掲『日記』p258
 - (35) 朝日新聞夕刊6月20日付
 - (36) 前掲『新聞と戦争』p463。公益財団法人蘇峰会事務局によると、1944年第1回徳富蘇峰新聞賞の設立趣旨と守山受賞の経緯を示す資料は残されていない。

- (37) 松尾邦之助『無頼記者、戦後日本を撃つ』（大澤編、社会評論社 2006）p36-37。松尾も前大戦中をパリほか欧州各地で過ごし、1946年戦後の引き上げ船で帰国した。
- (38) 同上p105およびp108

和仏辞典の系譜と問題点

木村哲也

はじめに

『コンコルド和仏辞典』（高塚洋太郎、他、白水社、1990年）の、執筆協力と編集・校正協力の両方の唯一の経験者である小生ながら、残念ながら絶版になって久しい。

その編集作業中に感じていたことを、他の新しめの和仏辞典も含めて述べた、拙論「和仏辞典を考え直す」（『人文論究』49号、北海道教育大学函館人文学会、1989年）からも、何と30年以上が経っているわけである。

残念ながら、この間、そもそも和仏辞典の刊行も少なくなった。先の辞典と同じ中辞典では、2010年に『プチ・ロワイヤル和仏辞典（第3版）』（恒川邦夫、他、旺文社）が出たのが最後である。そして、拙論での主張もなぜか、残念ながらずっと基本的に採り入れられていないままなのが実情である。

本稿では、当学会での2019年の全国大会での口頭発表で助言も受けた、和仏辞典の系譜についてまとめ直し、その後に和仏辞典の問題点についてまた少し考えたい。

1. 古い和仏辞典

①『佛語箋』

『佛語箋』は、2016年に出版社「港の人」から、「研究・索引・影印」の副題で、事実上の復刊という形で刊行されている。著者は加藤雷洲、望洋堂蔵板とある。「はじめに」の冒頭で、正確な刊行年は不明ながら、幕末から明治初期の刊行であることがわかる。126ページの和綴じの2冊の合本である。品詞別単語帳という感じであって、あいうえお順でなく、かな漢字配列である。和仏辞典で日本の最初のものであることは、はっきりしている。

さて、当初の出版社の存在についての疑義もあるが、本稿の趣旨とはややそれるので扱わない。

②『和佛辞書』

『和佛辞書』は、1899年に丸善から刊行されて、1905年には増訂版が刊行されている。

入手できた増訂版のほうを見る。ローマ字見出しで、A 5 版531ページである。著者は織田信義などである（織田信長の家系ではないようである）。他の著者にも、日本最初のフランス語学校である横浜の仏語伝習所の卒業生がいる。「緒言」は縦書きだが、左から右へである。見出し語はローマ字である。日本語に品詞表示があるのに驚くが、アルファベットによる略号ではある。「相互」が「あいたがい」と読まれ、なぜか連用形の「に」がついているのはまだしも、「相對」がそのまま副詞扱いなのは、少なくとも現代の視点から見ればやや違和感がある。また、用例はいっさいない。

③『和佛大辞典』

『和佛大辞典』は、1904年に横浜の天主堂から刊行されている。ルマレシャルの編訳である。やはり見出し語はローマ字で、A 4 版よりはやや小さい大きな版型で、1021ページである。巻末に正誤表であるERRATAや補遺であるADDENDAが印刷されているのが、失礼ながら時代を感じさせる。用例はない。例えば「かける」に、送りがななしで「懸、掛、架、係、撤、鎖、襲」と漢字が挙がっている。そして、その後に、見出し語として単漢字でも挙がっている。さらには、同じ漢字が語義によって複数回見出し語になるのはまだよいが、他の漢字をはさみ、再び見出し語にするのは理解に苦しむ。そこには、最初には挙がっていなかった漢字まで挙がってくる。異字同訓問題があるということを考えているのは、それなりに高い問題意識ではあるが、成功しているとはどうも言いえない。そもそもフランスで刊行するのではなく、日本で刊行するのであれば、日本人によるネイティブチェックも容易であったと思えるだけに、残念である。

④『白水社和佛辞典』

『白水社和佛辞典』は、1927年に刊行されている。松山順太郎編である。やはり見出し語はローマ字で、B 6 版で740ページである。後の同社の『新和仏中辞典』（1963年）『新和仏小辞典』（1973年）を思わせる版型である。さらには自社初の和仏辞典であるはずであるが、フランス語題には nouveau とついているのには驚く。それも後の中辞典や小辞典の前に「新」とつける

邦題と同じである。まえがきがフランス語である。用例はない。音読み漢字の見出し語に、漢和辞典よろしく熟語を繰り上げてまでして並べ、しかもそれを凡例で売り物にすらしているが、本来あるべき位置に見出し語がないのはかえって引きにくい気がする。さらには、②の辞典と比べても、かなり基本語が落ちている気がする。

1949年に再訂1版が刊行される。ページ数は変わらないが、薄くなっているのは、終戦直後ではあっても、辞書のあり方としてはむしろ好ましい気がする。

1952年に再訂2版が刊行される。これまでは茶色の装丁であったが、緑色になった。そして、初めてではないかもしれないが、白い紙カバーがある。現在の視点から見れば、辞典には珍しい。

1953年に再訂3版が刊行される。失礼ながら、現在の感覚で言えば重版でしかない感じがする（重版時に語釈の訂正などはするから）。

1954年に再訂4版、1955年に再訂5版が刊行される。

毎年の再訂版の刊行なので、部数は不明ながら、好調な販売と思われる。

⑤『和佛大辞典』

『和佛大辞典』はセスランの編で、明西社から刊行されている。B5版2365ページという、圧巻の辞典である。ローマ字見出しである。フランス語でのまえがきによれば、1939年初版であるが、入手しているものは、1957年の第3版である。改訂がなされたわけではないように思われる。用例もある。

⑥『マルタン和仏大辞典』

あえて『マルタン和仏大辞典』を先に扱う。1970年に白水社から刊行されている。セスランの和仏辞典と同じ版型ながら、974ページである。まえがきでは、そのセスランの和仏辞典についてふれられている、というか、基本的にセスランの和仏辞典の縮約版、現代語版である、としている。よって見出し語はローマ字である。ただし、用例はなくなっている。そして、日本人に向けたとあるが、日本人には向いていないようしか思えない。

この辞典についての具体的問題点は、後に扱う。

なお、『マルタン和仏大辞典』という姉妹版も1953年に白水社から出ているが、これも基本的に日本人向きではない。日本語がローマ字で始まり、かな漢字もついているからである。

2. 新しめの和仏辞典

①『新和仏中辞典』

『新和仏中辞典』は三木治、他により、1963年に白水社から刊行された。見出し語はローマ字である。これまでの同社の和仏辞典の流れにはない、ということか、『和仏中辞典』も出ていなかったのに「新」がついたものであろうか。ただし、「足あぶり」「腰弁」など、当時でも古めかしかったのではと思える見出し語も、正直目立つ。

②『新和仏小辞典』

『新和仏小辞典』は三宅徳嘉、他により、1973年に白水社から刊行された。見出し語はやはりローマ字である。基本的には前掲書の縮約版であるが、編者の一人の大賀正喜の提案で、囲み記事がついた。これはこれで非常に有効であるが、僭越ながら申せば仏作文の参考書や教科書との「すみわけ」が微妙なものになってしまったと、あえて申しておく。

また、前述の『マルタン和仏大辞典』と、相互に基本的に関連性が見られないのは不思議とも思える（同社の『仏和大辞典』（伊吹武彦、他、1981年）も、前述の『マルタン和仏大辞典』と関連がないようにみえるのが驚く。同社の『和伊辞典』（坂本鉄男、他、1988年）は『和西辞典』（宮城昇、他、1979年）を、囲み記事など形式上、はっきりと踏襲していることが見て取れるが）。

③『スタンダード和佛辞典』

『スタンダード和佛辞典』は、朝倉季雄、他により、1975年に大修館書店から刊行されていた。事実上、和仏辞典初の見出し語のかな引きである。しかし、改訂がされず、例えば「エイズ」も収録されないまま、平成どころか、令和の時代に入った。姉妹編の『スタンダード佛和辞典』（鈴木信太郎、他、1957年）が、1987年に新版が出たことを思うと、残念である。

④『コンサイス和仏辞典』

『コンサイス和仏辞典』は、重信常吉、他により、1980年に三省堂から刊行され、2003年に第3版まで出ている。編者に初めて、ネイティブスピーカーであるメランベルジェが加わっている。見出し語はかな引きである。文字どおりの凝縮の印刷で、昭和的な感じから、改訂版でかなり改善された。しかし、次に扱う辞典と同じ問題点が、基本的にある。

⑤『プチ・ロワイヤル和仏辞典』

『プチ・ロワイヤル和仏辞典』は、恒川邦夫、他により1992年に旺文社か

ら刊行された。1985年に同社から初版が出た田村毅、他による『ロワイヤル
仏和中辞典』の姉妹編である。2010年に3版まで出て、まずは本格派ではあ
るが、後の章でに詳述のとおり、残念ながらもまだまだとも言える。

⑥『現代和仏小辞典』

『現代和仏小辞典』は、三宅徳嘉、他編で、1994年に白水社から刊行された。
『新和仏小辞典』の改訂版と言える。版型は大きくなったが、ページ割はそ
のまま、ゆえに見出し語はローマ字引きのままである。これは何ともいた
だけない。平成の他の和仏辞典で、そのような辞典はないはずであるからで
ある。さらには、囲み記事も更新されているが、個人的には『新和仏小辞典』
のほうがよかった気がする。

3. 豆単や、仏和辞典との合本

論評はここでは避け、基本的に列挙するにとどめるが、最後のものだけは
多少、後でふれる。

『ベアー仏和・和仏小辞典』（錬金社、1972年）

『ジェム仏和・和仏辞典』（三省堂、1980年）

『ロワイヤルポッシュ仏和・和仏辞典』（旺文社、1988年。第2版、2008年）

『小学館ポケット仏和・和仏辞典』（1993年。→『ポケットプログレッシブ
仏和・和仏辞典』1998年。第2版、2006年）

『パスポート仏和・和仏小辞典』（白水社、2001年。第2版、2012年）

『デイリー日仏英・日英仏辞典』（三省堂、2001年）

『デイリーコンサイス仏和・和仏辞典』（三省堂、2003年。第2版、2011年）

『ル・ジショ2』（ヌーベル・エコール、2004年。和仏）

『ル・デイコヤマ』（ヌーベル・エコール、2004年。仏和・和仏）

『ル・テーマディック』（ヌーベル・エコール、2005年。仏和・和仏）

『身につく仏和・和仏辞典』（三省堂、2007年）

『ベーシックコンサイス仏和・和仏辞典』（三省堂、2018年）

4. 和仏辞典の問題点

ここでは、古い和仏辞典から『マルタン和仏大辞典』、新しめの和仏辞典
から『プチ・ロワイヤル和仏辞典』、仏和・和仏合本から『ベーシックコン
サイス仏和・和仏辞典』を採り上げて、問題点を厳しく指摘する。

①『マルタン和仏大辞典』の問題点

前掲の『マルタン和仏大辞典』（以下『マルタン』と略す）の「こ」という項目には、以下のような見出し語が挙がっている。

「子、児」、孤、弧、粉、海単、戸、小、故、湖、個、格、股

漢和辞典の親文字ではない。孤、小、湖、格、股は、日本人なら決して「こ」としては和仏辞典では引くまい。そして、だからこそフランス人用としても、なぜ見出し語があるのか個人的にはとうてい理解できない。分厚くて、項目数が多ければよい辞典というわけではないであろう。

続いて、連体詞「あの」「この」「その」のつく表現を引く（原本はアルファベット表記の順ながら、ここではその順のまま、漢字かな表記とする）。

先に確認すれば、連体詞としてはフランス語では、指示形容詞の *ce* とその変化形が対応する。よって、熟語化していなければ、仏語訳に差異はない。

「あの世」

「この間 [(あいだ)]」「この分」「この段」「この後 [(ご)]」「この項 [ママ]」「この辺」「この人」「この方 [(ほう)]」「この方 [(かた)]」「この位」「この前」「この儘」「この道」「この際」「この先」「この度」「この時」「この通り」「この年頃」「この上」「この上無い」「この上とも」「この世」「この様な」

「そのあいだ」「その場」「その場限りの」「その場逃れ」「その後」「その筈」「その辺」「その日」「その日暮らし」「その方 [(ほう)]」「その外 [(ほか)]」「その実 [(じつ)]」「その頃」「その位」「その癖」「その儘」「その道」「その道の人」「その物」「その昔」「その向き」「その折」「その節 [→その折]」「その筋」「その他」「その為」「その手」「その時」「その通り」「その次」「その積もりで」「その内」「その上」

(1)誤植や誤り

「この項」でなく、「この頃」である。濁音になっていなければ熟語とは言えないが、濁音にはなっている。正しい形として後で扱う。

「この後」は、「あと」でなく「ご」となっている。であれば「この期」である。しかし、仏語訳を見ると「あと」である。

(2)複数個所で熟語

「あの世」「この世」、「この道」「その道」。

「あの」はこの見出し語のみだが、「この世」が対応している。

「この上」「その上」も同じようではあるが、「この上無く」という表現があるので、先の例とは同じでなく、完全一致ではない。

(3)片側で熟語

「この間 [(あいだ)]」「この期」「この頃」「この方 [(かた)]」「この前」「その癖」「その通り」

ちなみに、「この頃」は、濁音化しなければ熟語ではない。

「その癖」は、あまり使われない気はするが、間違いではない。

(4)片側で掲載ながら

「この分」「この段」

状況という意味の「分」、事柄という意味の「段」だが、そもそも死語に近いし、「この」だけでよい熟語でもないであろう。

(5)熟語でないのに双方に掲載

「この辺」「この人」「この位」「この儘」「この時」

すべて「その」がつくほうも見出し語に挙がっているが、熟語では全くない。

全体としては、残念ながら、ややむやみに見出し語が多いだけ、という感じが否めない。

日本を出ているのに、日本人がかかわっていない。編集者も日本人ではなかったのか、などと思ってしまう。

②『プチ・ロワイヤル和仏辞典 (第3版)』の問題点

初版は1992年、第2版は2003年、そして第3版は2010年である (なぜか、初版編集委員の一人から思いがけず第3版は贈呈された)。

新しめの中辞典で、まだ論じたことのないこの辞典については、以下では、いくつかの観点から、あえて引き比べをしてみたい。

(1)対義語

「男」と「女」の冒頭を引く。

男 ⇨雄、大人、男子、男性

女 ⇨女子、女性、婦人、雌

「雌雄」の位置の違いや、「女」の側にもあってよさそうな「大人」の意図、「男子」「男性」とその対義語の位置の違いに、有意性は何ら感じられない。また「婦人」の対義語もない。わからない。しかも、今の時代、原稿レベルでマルチウインドで比較できるうえに、校正紙でも間近のはずである。

また、この二つの見出し語だけでなく、失礼ながら全般的にである。ただし、英語や国語以外の辞典では残念ながら普通ではある。

続いて「類語」を見る (() の外の日本語のみゴチ)。

男 homme m. 男子 (⇔女 femme)
sexe masculin m. 男性 (⇔女性 sexe féminin)
monsieur m. 男の人 (⇔婦人 dame)
garçon m. 男の子 (⇔娘 fille)
《話》 type m. ; gars m. ; mec m. やつ

女 femme f. 女 (⇔男 homme)
fille f. 娘 (⇔男の子 garçon)
dame f. 婦人、女性
sexe féminin m. 女性 (⇔男性 sexe masculin)
《話》 nana f. 情婦、女、女の子

書式を揃えることで語義を明確に示そうという気があるのかなのか、わかったようで、わからない。

双方の1行め、「子」の有無に有意差は感じられない。

「男」の2行めと「女」の4行めこそ、書き方は揃っているが、位置の差に有意性を感じるのは無理であると思う。

双方の3行め、訳語の違いはもちろん、「男」にだけ対義語を示しているのは、思いつきでしか書いていないと言われても仕方があるまい。

「男」の4行めと「女」の2行めこそ、書き方は揃っているが、位置の差に有意性を感じるのは、やはり無理があると思う。まあ、「娘」には、フランス語でも日本語でも、「若い女性」と「女の子ども」の両義性があるのは確かであるが、そのことが失礼ながら、ややもすれば心配にもなる。

双方の5行めは、こんなところであろうか。

さて、小生なら、例えば最小限、全体を以下のようにしたい。

男 homme m. 男子 (⇔女 femme)
monsieur m. 男の人 (⇔女の人 dame)
garçon m. 男の子 (⇔娘 fille)
sexe masculin m. 男性 (⇔女性 sexe féminin)
女 femme f. 女子 (⇔男 homme)
dame f. 女の人 (⇔男の人 monsieur)
fille f. 娘 (⇔男の子 garçon)
sexe féminin m. 女性 (⇔男性 sexe masculin)

いかがであろうか。なお、「男」「女」自体が《話》という感じの語でない

ので、あえてここでは落としてみた。

これが唯一最高とまで言うつもりもないが、このように考えることがきわめて有効であるとは、かたく信じる。

(2)表記

例えば「煩雑」である。「繁雑」も常用漢字表内音訓であるが、拳がっていない。

普通には意識としては、煩わしいかどうかは使い分けはされいないと思う(ちなみに元の中国語では「繁雑」をもっぱら使っている)。まあ和仏辞典としては、いちいち併記の必要はないであろうか。

しかし、「状況」には「情況」も拳がっている。こういう場合の方針は特にないようである(元の中国語では、別発音ながらむしろ発音しやすいから「情況」が優勢ながら、同義語と見てよい)。

そして、「夏季」である。「夏期」から先に拳がっている。だが、「夏期講習」はいいとして「夏期休業」「夏期休暇」とは、違和感のある表記である。現実には、検索でも「季」のほうが、文字どおりけた違いに多く(そもそも、元の中国語では「夏季」しかないうえに(他の季節ももちろん同じである)、仮に「夏期」があったとしても、別音である)。揚げ足取りでなく、こういう語学センスでは、訳語もあまり信用できなくなってしまうとあえて申しておく。

次に、「かたい」であるが、「堅い」「固い」「硬い」という常用漢字が拳がっている。用例での文字の使い分けも、易しくはなさそうであるところながら、特に違和感はない。

ただし、「かたく」では、用例で全部の漢字を掲げ、使い分けを明示していない。確かに使い分けは難しいし、個人的には意味がないとすら思っているのでかまわないが、ひらがなで「かたく」でも十分であったと思える。さしあたり間違いではないし、表記の使い分けは別の辞典の領域と思うからである。

さらには、「探す」はやっかいである。「探す」も拳がっていないながら、「捜す」のみが用例では使われている。こちらのほうが確かに当用漢字表発表当初から使われているのであるが、検索の結果では音訓改定で加わった「探す」のほうが何倍も多い。そして、「搜索」「探求」からして、使い分けに異議はないものの、意識している人が多いとは思えない。「探す」だけの人が多そうな現実があるが、逆に「捜す」だけしか使わないという人がいないと言ひ

きれないし、違いを書き分けている人でも、普通に発話している際にも意識しているわけではなからう。さらには、他人の話を活字化する場合には、判断しにくいであろう。

ただし、しっかり区別をするならば、フランス語とはおもしろい符合がある。

Je cherche mon secrétaire qui sait parler français.

「私はフランス語を話せる秘書を捜している」

Je cherche un secrétaire qui sache parler français.

「私はフランス語を話せる秘書を探している」

直説法現在形を使えば、いたはずの秘書とはぐれた、ということであるのに対して、接続法になれば、そのような秘書はまだいないということである。

ここで思い浮かぶのは、「陰」「影」である。本来、同訓異字であるが、国語辞典でも同音異義語であるかのように、別見出しになることが多い現実があるので、和仏辞典でも別見出しであることに異議はない。ただ、フランス語では基本的に、ombre に部分冠詞がつくのが前者で、定冠詞でも不定冠詞でも複数形もあるのが後者である、というような、日本語の書き分けとの差異との照合を明示してもよさそうに思える。

この手のものでは、「暖かい」「温かい」もある。この和仏では一つの見出し語のもとで語義区分をしてはいるが、その使い分けは明白とは言えない。「かげ」を別見出しにしているほどでも、「暖」と「温」の使い分けを明示しない国語辞典もある中、無理もないところもある。さて、「あたたかい風」の場合、自然の風と、温風機の人工の風の両方があり得る。フランス語では、vent chaud と souffle chaud と、名詞のほうが変わってくる（ただし、後者でも自然のそよ風ということはあるが）。いくつもあるわけではなからうが、こういうところこそ和仏辞典に大いに期待したい。

(3)配列順

国語や英語の辞典でも、最近では乱れているものもあるが、英語以外の和外国語辞典では、そもそも用例以前に、同音語の見出し語の配列も乱れているのが、通例と言える状態である。

ただし、さすがに、単独音の見出し語そのもののあいうえお順まで崩れているわけではない。

「とる」であるが、常用漢字表内音訓でも5とおりに書ける。個人的には、同一和語は一つ見出しにして、語義区分と表記を対応させるべきかと思って

いる。

さて、和仏では「取る」「執る」「捕る」「執る」「撮る」「録る」の順で、六つある。

国語辞典的には「取る」「執る」「採る」「捕る」「撮る」の順である。

また「録る」があるなら、「盗る」「撰る」などの表内字ながら表外音訓もあっていいのでは、と際限がなくなる。常用漢字表を全面的に信奉はしていないが、何らかの基準は必要である。

この見出し語だけがこうなのではないのは、失礼ながら言うまでもない。

そして、「とる」では、prendre が訳語になり得る字を、最初に指摘してもよさそうに思う。

次に、「はる」(動詞)「春」の順ながら、「猿」「去る」だったりしが和仏である。

国語辞典でも、動詞が先とは限らないが、辞典内での統一はされている。

フランス語ができなくてもかまわないから、国語辞典に詳しい人を必ず一人加えて、こういうことはお任せすべきであると強く感じる。

国語辞典でも、三省堂『新明解国語辞典』では、1989年の第4版から、理系の山田明雄が加わり、語釈の改訂に参加しているとみられる。

戻って、先ほどの「夏期」では、合成語の配列順が「講習」「休業」「休暇」と、あいうえお順と逆順である。三つ程度の少ないところだからよいが、10個もあれば探しにくい、というか、そもそも辞典とは言えない。正しい情報が載っていることは当たり前のことである(もちろん、この辞典でもさすがにしっかりしている場合もあることは、補足しておく)。

そして「こうえん」では「公園」「講演」「公演」「後援」「好演」「高遠」の順である。「公」の字がついている熟語が離れているのは、普通の国語辞典ではありえない不便さである。国語辞典的には「公園」「公演」「好演」「後援」「講演」「高遠」である。

扉裏に掲載のコロケーション等にも、同じようにさまざまな問題点がある。

個々に挙げるぐらいなら、改訂するか、自分で一から辞書を作るしかあるまい。

際限がないので、このあたりしておく。

③『ベーシックコンサイス仏和・和仏辞典』の問題点

先の辞典式に見ていっても、仏和と合本で736ページながら、仏和との不

整合もかなり相当に問題点がある。

また、ドイツ語や中国語でも事情は全く同じで、なおかついずれも見出し語の選定が基本的に無方針である。

辞書は三省堂、という言葉が泣く、と申し上げたい。英語や国語以外ではそんなものであろうか。

編集部に詳細な申し立てをしても、なしのつぶてであることも、あえて申し上げます。

おわりに

もう紙の辞典は出ないのではとも思える時代に、和仏辞典のこれからをあえて考えるならば、豆単レベルの箇所は、ややお粗末ながら google などの電子辞書に基本的に任せるべきかと思う。

むしろ、本稿で指摘したような箇所に注意し、関連語に配慮した基本語辞典を出すべきであろうか。

末筆ながら、本研究ノートに、あらさがしのつもりは少しもない。「体裁はある部分からは内容にかかわる」ということを主張しておく。

百年を超える和仏辞典の歴史である。その伝統をけがすべきではないと思い、とりあえずのぶしつげな考察を終える。

[研究ノート]

アランの思想に基づいた我が国の社会現象の分析

高村 昌憲

はじめに

フランスの哲学者アラン（1868-1951）は、我が国においては『幸福論』（1928）の著者として有名であるが、その思想については十分に受容されていないと思われる。『幸福論』を読めば幸福になれると思って読み出す読者も多いようである。しかしながらその願いは、本書を読んだだけでは殆ど叶えられないに違いない。何故なら本書は、読者が直接的に幸福になれるために書かれたものではなく、幸福の真実や本質について考察された本であるからである。但し、本書を読むことによって、間接的に幸福になれる機会を多く手に入れることはあり得るかも知れない。幸福とは何か？ その本質を知ることが、残念ながら直ちに幸福になるために必要なことではないだろう。何故ならその本質を知らなくても、幸福を感じている者は沢山いるからである。しかし知ると知らないとは大違いである。幸福の本質を知る者は、幸福を正しく理解することによって本当の幸福をやがて手に入れることが可能になるであろうし、幸福を感じている者は何時までもその幸福を失わずに生きて行けるであろう。思想とは、直接的にこの世に存在するものとして容易に操作出来るものではないが、様々な思考に共感して理解することによって、実生活に機能させるための様々な方法を取得出来るものでもある。

我が国の社会現象もアランの思想を知ることによって、それらの本質を共感しながら理解して正しい社会の変革を可能に出来る一助になり得るかも知れない。勿論、性急に機能させることは困難であろうし、慌てることはないのかも知れない。但し、正しい意見は殆どが最初は少数意見でもあったことを思い出して欲しい。

1. 教育の目的に関する分析

夢を持って、夢を諦めるな、夢に向かって頑張れ、とは我が国において成功した有名人たちが子供たちに向かって言っているのをよく耳にする言葉である。スポーツやコンクールなどの競争を通しての教育の現場でも多く聞かれる。しかしながらアランは、競争と教育は別物であることを明確に指摘している。何故なら競争の目的は相手に勝つことにあるが、教育の目的は自ら考えて解答を見付けて自らが向上しなければならないからである。競争は結果第一主義であり、結果が良ければ全て良しとする現象である。しかしながら教育は、自らが向上するために解答を見付けるまでのプロセスを重視し、結果よりも興味や向上心や本当の楽しみを自ら形成することを目的としている。従ってアランにとって教育とは、〈夢〉を諦めずに〈夢〉に向かって頑張るものであっても決して勝利するためのものではなく、〈夢〉を持ちながらも思考したり努力したりすることから人間性や本当の楽しみを身に付けることが目的であったと言える。目的を間違えると重大な問題が生じて来るのである。競争すれば一所懸命に頑張れるであろうが、泥棒やスリも人一倍頑張るのである。

実際にアランはグラン・ゼコールの高等師範学校を20歳の時に受験するが、その時の試験官が偶々哲学の担当教師であったジュール・ラニョー先生(1851-1894)であった。試験問題であった「正義」についてアランが思考したことがないことをラニョー先生は了知していたために、その場でアランに即答することを禁じたのである。そのためアランは答案用紙の裏に詩のようなものを書いて不合格になり、一年間を棒に振った経験をしている。130年も前の出来事とはいえ、現在の我が国の教育制度では考えられないことである。

又、或る小学校の算数の授業で、先生が一人の児童に足し算の問題を出すと、その児童はとんでもない答えを言って仕舞ったのである。先生は再度答えるように促したところ、今度は僅かに違う数字を言ったので、その儘訂正することなく次の児童へ別の問題を出したが、この先生のことをアランは褒めているのである。これも我が国の小学校では考えられないことである。

以上の二つの事例は、当時のフランスの教育は解答が合っていれば良いものではない証左である。例えば授業中にスマホを操作して解答しても、決して教育にはならないのであり、本当の楽しみはスマホの操作そのものよりも他にあるに違いない。何故なら本当の楽しみを湧出させて身に付けるための

プロセスが欠如しているからである。その意味で授業へのスマホの導入は、知識の取得や普及という観点を除けば、十分に注意すべきことであろう。本当の楽しみは創作したり、鑑賞したり、運動したり、収集などしたりするプロセスの中にあると言える。そのためには繰り返し行うこと、我慢すること、忍耐することも、教育にとっての要件であることをアランは指摘しているので付け加えて置きたい。

2. 紙媒体から電子媒体へ

15世紀中頃のヨーロッパにてグーテンベルグ（1398頃-1468）が実用化したと言われる活版印刷術は、羅針盤、火薬と並んで「ルネサンス三大発明」の一つであるが、印刷革命とも言われている。それは知識の普及と共に科学の発展にも貢献し、コペルニクス（1473-1543）の地動説などを可能にした。そして現代の電子書籍等の電子媒体は第二の印刷（又はコミュニケーション）革命と称されており、より一層多くの文献等の普及に寄与して行くものと思われる。紙媒体から電子媒体への移行は、思想においても幾多の影響を与えるに違いない。つまり本の出版が少ない経費で可能になったのであるから、少数者の正しい意見が余り時間を掛けずに伝播し普及して行くことが可能になるであろう。従って普及のための経費と労力が少なくて済み、為政者や富裕家などの権力者たちの意見が優先されることもなくなり、意見や学説の公表も公正に行われて正当な世論が形成されるであろう。勿論、フェイクニュース（虚偽報道）などの問題点も多くあるが、いずれにしてもその可能性が新しく生まれたことは喜ばしいことである。

アランは、パリにあるリセのアンリ四世校を65歳で定年退職するまで、一介の哲学教師を全うした。その間にソルボンヌ大学への招聘を固辞したこともあるが、それはまさに自らの思想の自由な表現を願っていたためであった。アランにはルアン新聞にプロボ（語録）を毎日寄稿したり、単行本を刊行して公表したりする場があった。もしもアランが現代に生きていたなら、プロボを書けば直ぐにでも公表できる電子書籍を活用していたに違いない。アランは只管、書く行為のみを探索していたのである。1951年に、リューマチで床に伏せていたアランが自宅のベッドでリセの教え子であったアンドレ・モーロア（1885-1967）から文学国民大賞を授与したのは、死の20日余り前の5月10日であった。それまでは全ての賞を辞退していたが、それは授賞式に出席する時間を惜しんだのが主な理由であったと言われている。アランに

とって地位や名誉は無用であり、却って邪魔でさえあった。

文字を動物の骨などに記した時代やパピルスに記した時代は判読することさえも難儀であった。コペルニクスが地動説を主張して著した『天球の回転について』（1543）がやっと本になったのは死の直前であった。しかも本書はその後も久しく人々に読まれることは殆どなかった。あるいはアランの教え子であったシモヌ・ヴェイユ（1909-1943）の箴言集『重力と恩寵』について言えば、生前に知人に預けられていたノートが編纂され出版されたのは死後の1947年であった。紙媒体の書物の刊行には高額の費用が必要であり、金銭的負担が近親者に及んだ例には枚挙に暇がない。

しかし現代は電子書籍などの電子媒体の発明により、容易に多くの文章などが読めるようになり、短時間で世界中に自ら公表出来るようになったのである。しかも電子書籍の公開に係る費用は紙媒体の本よりも遙かに安価であるから、実生活上の金銭的犠牲も不要となった。表現のみに集中出来るのである。アランが望んでいた生活が現代においては、まさに殆ど誰にでも可能になったのである。

3. 政治論・経済論に見る個人と集団

政治における平等は正義の問題であり、不平等を容認することは独裁の許容と受け取られるであろう。その意味で政治論とは、敢えて言えば個人と集団の問題であり、為政者を選出する選挙制度の問題も重要であると見做して良いだろう。

その意味でアランは断固とした共和主義者であり、集団よりも個人を重視する思想家であった。その反対に、集団・全体・国家を重視する思想家にはモーリス・バレス（1862-1923）などがいた（バレスは、アラン同様にラニョーの教え子であったが、ラニョーのバレスに対する評価は不評であった）。1894年10月にアルフレッド・ドレフュス大尉（1859-1935）が機密情報流出の罪により逮捕されたドレフュス事件は、その後長い間フランス社会を二分したが、我が国の場合は近代以後に国が二分するようなことは一時的にあっても殆ど長くはなかった。1945年の終戦を挟んでそれ以前が集団重視であり、以後が個人重視の社会と言えなくもないだろう。勿論、この見方は余りに大雑把すぎると批判されても仕方ないので、個人と集団の問題についてアランの思想に基づいて分析して明らかにしてみたい。

アランの渾名は、〈人間を大事にする人〉という意味を込めて「l'Homme」(人

間)と呼ばれていた。アランが共和制を支持するのも、人間の評価は個人によるものであり、封建制に見るように決して所属する団体や出生や学歴によるものではないという思想があった。従ってその選挙制度においてもアランは比例代表制には反対であり、急進的平等(誠実な市民としての平等)から〈人間〉を選ぶことになる。〈抵抗と服従は市民にとっての二つの美德である。服従によって命令を確かなものにする。抵抗によって自由を確かなものにする。抵抗しながら従うことは全くの秘密ごとである。服従を破壊するのは無政府主義である。抵抗を破壊するのは独裁である〉とアランは言っている。〈共和制を形づくるのは「市民」であり、抵抗と服従は人間に対して行うものであり、集団に対して行えるものではない〉ともアランは言っており、個人と集団の相違を論じる問題は同一平面上で行うべきではなく、別次元の問題であることを明言しているのである。

それに対して王党派などの集団を重視する思想の論拠となっているのは、進化論を形成したダーウィン(1809-82)の『種の起源』(1859)である。〈変わらないと生き残れない〉という思想を助長しているのである。そして進化しなければならぬので、弱い者や病気の者は「人類の進化」にとって邪魔であり不用であるという思想を敷衍し、歴史的には〈優れている者は劣っている者に教えて支配するもの〉としての植民地政策を正当化したのである。しかしながらその思想は、病人を救って長生きさせる近代医学を否定するものにもなって仕舞い、やがては〈ユダヤ人は劣っていてドイツ社会の害となる〉との極端な観念に基づいてナチスのホロコーストへ向かった一面にもなり得たのである。あるいは進化論同様にコミュニズムの理想という目的掲げて1930年代に〈大粛清〉を実行したスターリン(1878-1953)の蛮行も、内務人民委員部という集団への依存無しでは到底思考し実行出来なかったに違いない。

進化論は生物学上の仮説に過ぎない。オーギュスト・コント(1798-1857)は、法則が分かり難い6つの学問(科学)分野を順番に並べている。つまり抽象から具体への順番であり、抽象の割合が高ければその学問分野の法則は例外が少ないから分かり易くなる。反対に、抽象の割合が低くて具体の割合が高いと例外が多くなってその法則は分かり難くなる順番である。その6つの学問分野とは数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学の順番であり、生物学は化学よりも分かり難いものであり、生物学の法則には例外が多いのである。実際に、ファーブル(1823-1915)は『昆虫記』(1879-

1907)の中で、或る種のクモは何時も蜂に食べられているし、蜂は何時もクモを食べているが、進化するならクモは蜂に食べられなくなる筈であり、蜂の狭食性も進化して他のものを食べるようになる筈であると言って進化論を批判している。そしてコントも、生物学によらずに人類の発展に寄与せよ、と言って進化論を批判しているのである。

以上のことからアランの思想は、具体の個人としての人間を重視するものである。ナイフで刺されれば痛みを感じるし、血も流れる生身の肉体を無視しないで思考する者の思想である。この様にアランの個々の作品が事例を頻繁に使用して表している所以でもあり、少なくとも抽象的な思想の体系化を求めて思考することはなかったのである。厳密に言うと、この世には具体の直線は何処にも存在しないのである。〈直線〉という抽象化され体系化された〈血の流れない〉法則として理解されるだけである。因みに、ドレフュス事件におけるアランの姿勢は、ドレフュスが冤罪であった点を非難し続けて個人的に終始ドレフュス派であったことは言うまでもないであろう。

4. 歴史論と現代社会の関係

歴史は繰り返すと言われる。繰り返すものであるから歴史論が成り立つのであろう。あるいは歴史は何処にもあり、数多く歴史があるから抽象して歴史論として考察し得るのであろう。〈歴史学とは時代区分である〉とまで言った歴史学者もいた。従って、残念なことに歴史は生の儘の真実ではなくって仕舞う場合があり、多くの仮説が存在することになる。信頼できるのは数字だけになる。〈数字が全てです。全てが数字に従っています〉とアランは言う。歴史学を数理化することによって真実を探求しようとするのであろうが、その困難性は誰でも知っているところである。その点でアランは、歴史学よりも地理学の方が信頼出来るのである。ノルマンディー地方の屋根の形が上方に向かって尖っているのは、雨が多いからである。それは地理学上の真実であり、歴史学上の真実よりも信頼できることをアランは指摘している。

歴史学の困難性について、ここで我が国の事例についても触れてみたい。徳川家康と武田信玄が戦った「三方ヶ原の戦い」(1572)において徳川方が負けたのは兵の人数が少なかったためであり、江戸時代初期の記録では徳川方8千、武田方2万(又は3万余り)となっている。ところが江戸時代中期の記録では武田方は4万になり、後期の記録では4万3千になっている。徳

川家康が大敗した戦であったので、敗戦は仕方ないものと世間に思わせようとして、後年の権力者側の都合で事実が隠蔽されて敵方の兵の人数が事実よりも多く改竄された可能性があることを、磯田道史氏（1970- ）は指摘している。古文書に書いてあるから、それが真実であるとは一概に見做せないのである。歴史学には学問（科学）としての困難性がある一例であり、コントが社会学としてその法則の分かり難さを示した所以でもある。歴史学における新しい事実を掘り起こす困難性に対する処方としては、やはり事実の積み上げを行うことが最も有効であろう。つまり一つの記録（古文書）に固執しないで、その記録とは無関係な他のものを発見して同一であれば真実と見做しても良いであろう。例えば「三方ヶ原の戦い」における武田方の人数について言えば、徳川方とは直接的に関係のない古文書等の記録を当たることである。実際に磯田氏も「前橋酒井家旧蔵聞書」や武田方の『甲陽軍艦』を読んで検証しており、徳川方の改竄の可能性を指摘している。何時の時代でも〈権力の都合で情報は操作される〉可能性があり得るのである。但し、例えば国家機密を保護する場合は将来に情報公開することを条件にして行うべきであり、その検証を可能にして置かないと〈国を誤る〉ことになる。磯田氏も懸念している。最近の我が国における「森友・加計問題」などに見る公文書の改竄問題などは、その懸念が杞憂でなくなって来たのではないだろうか。

勿論、事実を事実として検証することは歴史学にとって重要な問題であるが、更にもう一つ重要なことは現代との関係である。〈時代区分〉もその一つであり、歴史を歴史論へ発展させて確立させる思想を表す一つの方法である。歴史という事実を時代という流れに沿って抽象した器に分割する方法であり、様々な器が考えられるに違いないし、それは一つの思想にもなり得るだろう。ところが「分かり難い法則」にならざるを得ないために色々な仮説が生まれるのも当然である。〈事実〉を右から見るのか左から見るのか、あるいは前から見るのか後ろから見るのかによって大きく変わる場合もある得るだろう。そして個人として見るのか、集団を意識した目で見ると、その見方によっても大きく変わって来るに違いない。アランの場合は終生あくまで個人として見続けた哲学者であり、歴史学を王党派や共和派などの集団・社会・国の対象として捉えるソルボンヌ風な見方を回避し続けた哲学者であった。

例えば、ブルジョアとプロレタリアに対する見方も全く個人的な見方で

あった。ブルジョアとは利得を引き出すために人間の秩序に働きかける人であり、プロレタリアとは生産を引き出すために外界の秩序に働きかける人を意味していた。前者には聖職者、大臣、先生、銀行家、商人などがいて、後者には坑夫、大工、鍛冶屋などがある。医者について言えば、問診を主要な仕事とする内科医はブルジョアであり、言葉ではなくメスを使用する外科医はプロレタリアである。会社では、営業の仕事をする人はブルジョアであり、工場で働く人はプロレタリアである。レストランでは、お客の給仕をする人はブルジョアであり、料理を作る人はプロレタリアである。この様にアランはブルジョアとプロレタリアを全く個人的な見方で理解しているのである。両者を、搾取する者の集団と搾取される者の集団と見ることがないために、決して階級闘争の対象にはならなかったのである。従ってアランにとっての歴史学はあくまで個人を対象にするものであって、或る時代の人間や事件を抽象して共通した観念に纏める〈時代区分〉を可能にするものではなかったと言える。アランにとっての歴史論とは、現代に影響を与え得るものとしての歴史を考察するものでもあったと言える。現代を生きるアランは、歴史という過去を見詰めて分析し思考しながら、後ろ向きで未来へ前進するための指針を思想として表していたのである。

5. 思想の元となったプロボ

フランスでプロボ（語録）と言えば、アランのプロボを指す。あるいはソネット（十四行詩）と言えば、ボードレールのソネットを指し、英国でソネットと言えば、シェークスピアのソネットを指すのと同様に、既に一般的に理解されている言葉になっている。アランは1893年にブルターニュ地方のロリアンでリセの哲学教師になっていたが、プロボは1900年5月14日から11月15日まで毎週のように「ロリアン新聞」にアランの筆名で24篇を掲載したのが始まりであった。それまではクリトンの筆名で『形而上学と倫理学』などの哲学雑誌に論文などを発表したり、習作帖を毎日書いたり、休日や夜間には労働者などの社会人に対して講義をするロリアンの民衆大学を創設したりした。アラン自身は植民地政策を支持する集団にいたこともあったようだが、その後は自らの思想に目覚めて、敢えて言えば共和制擁護の民主主義者・自由主義者（ユマニスト）・個人主義者・進歩主義者として生涯変わることがなかった。

「ロリアン新聞」の次には、1903年7月9日の「ルアン新聞」に〈日曜日の

プロポ)の1回目が始まり、1905年まで92篇が掲載された。その後は〈月曜日のプロポ〉となり1906年まで42篇が掲載された。合計すると134篇になり、殆どが政治、経済、教育関係のプロポであった。1905年9月11日には300頁近い原稿『一般的分析法』を焼き捨てているが、習作帖には次のように書かれていた、「哲学は良くない仕事である。何故なら、物事の本質を注意深く凝視することが既に解らなくなるからであり、一種の代数学に帰せられ、曖昧な記号法で一杯になる」。

1906年2月16日の「ルアン新聞」に〈一ノルマンディー人のプロポ〉*Propos d'un normand* の1回目が載る。以後、アランが第一次世界大戦に兵役志願して参戦した1914年9月1日まで3083篇のプロポが、毎日のように掲載され続けた。便箋2枚程度の原稿であったが、原稿料の無い無償の作業であった。

以上の1914年までのプロポ3241篇及びその他の新聞記事は、アラン没後50周年の記念事業としてパリのアラン研究所から『一ノルマンディー人のプロポ』全10巻として1990年から2001年まで殆ど毎年のように刊行された。これらのプロポはアランの思想の元を成すものであり、あらゆる分野においてのアランの広範な思想を玩味することを可能にしている。

なお、アランのプロポは復員後も続いて執筆されて膨大な数になり、アランの思想を敷衍して数々の作品を出版して行くが、ここでは割愛する。因みに冒頭で触れた『幸福論』も、原題は*Proros sur le Bonheur* (幸福についてのプロポ)である。幸福に関係したそれらのプロポを集めて作品としたものであり、決して幸福について体系的に思考したものではない。

このように現代においても初期のプロポが全て読めるのは、幾人かの新聞の読者がそれらのプロポの記事を切り取って保管していたからである。第一次史料の重要性を痛感するが、捏造や改竄が意味を成さないところにアランの思想の高適さがあるように思える。何故ならアランの文章を捏造したり改竄したりしても、現代に生きる者の権力が強くなるものではなく、お金持ちになるものでもなく、地位が高くなるものでもないからである。具体的世界の中において気付かなかったことに気付き、知らなかったことを知り、理解出来なかったことを理解出来るようになることがアランの歴史論の真実であり醍醐味でもある。それは現代を意味あるものにしてくれるものであり、本当の楽しみと幸福というものを悉皆了知させてくれるものでもある。

おわりに

2006年6月に私は妻と一緒にパリにいた。嘗て結婚した時にパリへ一緒に行く約束をしたが、果たせないでいた。娘たちも一人前に成長したので、長年宥えていた胸の裡もやっと晴れた気持ちであった。丁度その頃、サッカーの世界カップが隣国のドイツで開催されていた。前回の2002年日韓大会の時ばかりでなく、ワールドカップが開催されている時の我が国はサッカー一色で大騒ぎであったので、パリもさぞかし賑やかだろうと予想していた。ところが賑やかどころかパリの街にはポスターも見当たらず、ワールドカップが開催されている気配が全く無いので却ってびっくりした。現地のフランス人にそのことを尋ねると、騒ぐのは労働者たち位とのことだった。それから彼のアパートマンを訪ねて部屋に入ると、壁二面が上から下までの本箱に日本関係の書籍がぎっしり収まっているので又びっくりした。フランス人がワールドカップのように他人と共通した関心事や興味で大騒ぎすることが少ないのは、自分自身の興味や趣味を持っている人が多いためであるのかも知れない。そして自分自身の感情や考えを相手に伝えられる人も多に違いないと思った。あるいは権力者への批判を減少させるためとされている^{スリーエス}3S政策（国民に対してスポーツ・スクリーン（映像）・セックスを大目に見て権力に批判的にさせない政策で米国が顕著と言われる）も殆ど効果がないのかも知れない。いずれにしてもフランス人にとっての社会や国は、フランス革命を契機に権力者から与えられたものではなく市民自身が築いて行くべきものであって個人のレベルで思考する傾向が強いのにに対して、我が国の市民は抽象的な集団や社会や国家のレベルから発展や正義を思考する人が多いように思われた。

新型コロナウイルスに対する政策も、景気対策や企業対策は重要であるが、やはり個人が死なずに済む直接的な対策を優先すべきであると提言したい。病人への対策は元より、失業者等の生活困窮者の対策を個人レベルで優先すべきである。喫緊の要務は個人にある。何故なら個人は血を流すが、企業や集団は直接的に血を流さないからであり、個人レベルでの手厚い助成金を支給すべきである。その代わりに個人にも責任を持たせて沈静化するまで無責任な行為への罰則は当然であり、企業やお店のための助成金は死なないで済む個人レベルの助成金で先ずは代替すべきである。まして旅行や外食を奨励する助成金などは論外である。勿論、医療機関に対しては個人レベル及び設備関係などの全ての面で助成すべきであるのは言うまでもない。

最も優先するのは何かを考える時、抽象的なものよりも具体的なものを優先することがアランの思想でもある。〈我思う、故に我在り〉はデカルト（1596-1650）の有名な命題であるが、思考して抽象する〈我〉と、在る〈我〉は次元が違うのである。二つの〈我〉への自覚は、社会や国家の健全な発展を思考する時には必要な条件になるであろう。何故なら、個人も社会や国家の中で責任を持って存在して来た事実があるからである。しかし喫緊の要務は、社会や国家を思考して抽象する者が血を流す者の存在を許容するために営為することにあると言って良いだろう。血を流す者を、血を流さないものへ抽象することでは決してないのである。

集団が紅組と白組に分かれた儘でいるなら、やがて争いが起こるのであろうし、それは国と国とのレベルになれば国交断絶になって戦争が起こるのであろうとアランは予見する。従って、例えコロナ禍で自由な行動が制限されていても、何らかの方法で人と人並びに国と国との交流を進んで行うことが平和の基礎となるに違いないと思考することである。国際交流の歴史が重要であって、戦争に基づいて抽象した歴史論は決して重要ではなく有益でもないと思ふことが肝要である。しかしながら事実として戦争の無い歴史は無いと言われている。ところが事実をその儘許容せずに、個人として戦争を望んだ者は肯定されるべきでないことを強調しているのがアランの歴史論であると言っても良い。

現代の我が国が戦争から遠い国でいられるのも、敗戦という過去の記憶があるためであろうが、この記憶が薄れて来た時には再び戦禍を経験しないとも限らない。そのためには国際交流はより一層重要になって来るに違いない。その時にアランを生んだフランスとの交流は、我が国の平和と発展により一層寄与することになるであろう。（完）

<参考文献>

ALAIN, *PROPOS D'UN NORMAND* I - V, Gallimard, 1952-60.

ALAIN, *PROPOS I*, la Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1956.

ALAIN, *ÉTUDES*; Gallimard, 1968.

アラン『アランの「エチュード」』高村昌憲訳（創新社、1984）

アラン『初期プロポ集』高村昌憲訳（土曜美術社出版販売、2005）

アラン『一ノルマンディー人のプロポ（I-V）』高村昌憲訳（ロマンサーの電子書籍、2019）

磯田道史『日本史の内幕』（中公新書2455、2017）

【執筆者紹介】

本 間 圭 一	北見工業大学教授
樋 口 いずみ	早稲田大学大学院博士後期課程単位取得退学
池 村 俊 郎	帝京大学教授
木 村 哲 也	北海道教育大学函館校准教授
高 村 昌 憲	アラン研究家、翻訳家、日本詩人クラブ会員

(掲載順)

編 集 後 記

2021年3月2日（火）に本学会の前会長であった清水勲先生が前立腺癌のため永眠された。会長職の勇退後もジョルジュ・ピゴー等の漫画・諷刺画研究家としてご活躍されていたので、突然の訃報に吃驚している。享年81歳であった。衷心よりご冥福をお祈りする。

今号への執筆を希望していた研究者は、2020年9月末までに7名が意思表示されていた。しかしながら実際に原稿を提出されたのは、結果的に5名であった。辞退された主な理由は、コロナ禍のために図書館等が閉鎖したために資料の取得が困難になり、原稿の完成が間に合わないとのことであった。万やむを得ない理由であったので、今号は5名となった。当初は原稿締切日を延長する案もあったが編集委員会で検討した結果、次号（第48号）への掲載に期待して今号は予定通り2021年6月の発行を目指すこととなった。コロナ禍のために辞退された研究者の方々には捲土重来を期して戴きたい。

又、コロナ禍の中を各々特色ある研究内容の原稿を頂戴した執筆者諸氏には、深く感謝申し上げる。日仏交流に係る研究の深化及び本学会の更なる発展のために、今後も多くの研究者の玉稿を賜りたいと思う。2020年12月からは初の試みであるZoomによるオンラインの研究発表が開始された。研究成果を本誌に掲載して戴くことで、より一層の優れた相乗効果も期待したい。(T)

学 会 記 録

全国大会及び月例研究発表会

2020年(令和2年)6月～2021年(令和3年)5月

期 日	回数	題 目	発 表 者	会 場
2020. 6.13	(44)	(全国大会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止)		(N)
12.19	499	1940年パリ陥落を見た日米ジャーナリストの報道から考える	池 村 俊 郎	Z
2021. 3.20	500	日仏修好通商条約、その内容とフランス側から見た交渉経緯	有 利 浩 一 郎	Z

会場：N = 日仏会館 恵比寿（5階洋室）
Z = オンライン（Zoom）発表

役員等氏名（五十音順）

(役員)

会長	池村俊郎	
副会長	浜田泉	
理事	猪俣紀子	楠家重敏
	白井智子	高村昌憲
	中島裕之	野澤丈二
	ル・ルー ブレンダン	
監事	今井隆太	川島瑞枝
評議員	石崎晴己	滝澤忠義
	西堀昭	平野実

(事務局)

事務局長	野澤丈二	
会計	ル・ルー ブレンダン	
ウェブサイト	学谷亮	中津匡哉
庶務	那波洋子	

(学術委員会)

委員長	浜田泉
学会誌	高村昌憲
月例会	野澤丈二

(編集委員会)

委員長	高村昌憲	
委員	池村俊郎	浜田泉

(2021年6月12日現在)

ISSN 0386-6637
Furansugaku Kenkyu

『**仏蘭西学研究**』 第47号(1972年創刊)

2021年(令和3年)6月12日発行

頒価 1,500円

発行人 日本仏学史学会 池村俊郎

事務局 駿河台出版社内

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-7

電話 042-678-3983 (事務局直通・野澤)

印刷所 スピックバンスター株式会社

〒112-0014 東京都文京区関口1-47-12

電話 03-5225-4142